

麻生路郎主幸

川柳雜誌

六月號



道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいい。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。御通知次第早速參上確實迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

加茂川句會

日時 六月十日(土)午後七時
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
兼題 「峠」三句 司郎選
會費 金 參拾錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京都支部

九三會

(日時) 六月十一日午後六時半
(所) 東區南久寶寺三休橋筋南入
(題) 「蝸牛」 路郎選
(幹事) 梧郎、八步、開路、柳次

天王寺句會

(日時) 六月十二日午後七時
(題) 「寺」三句
(所) 大阪天王寺區北河堀町八八
幹事 松浦南面子

光笑會

(日時) 六月十四日夜
(所) カナメ喫茶店
(題) 「俱樂部」三句
大阪市南區疊屋町六
幹事 永田里十九

雜誌「團扇」

川柳募集
十句
翠 選
六月二十日締切
用紙 ハガキ型
投句所 大阪市東區粉川町一六
生田 翠 夢宛

道ブラから天牛へ

書籍 購買 天牛本店
大阪市南區日本橋南詰東入
南側 (電話南二七四八番)

懸賞川柳募集

路郎 選
六月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投句所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

大正日日柳壇

(百貨店) 六月四日
(汗) 六月十一日
(幸) 六月十八日
(海) 六月廿五日
同 同 同
五句(住所氏名、雅號)
明記の事
用紙 ハガキ又は同型用紙
發表 「毎日」大正日日新聞
投句所 大阪市此花區上福島
南三ノ六六松盛琴人方

川柳手拭

路郎主幹
金三拾錢
(送料共)

清 酒

白鶴禮讚

白鶴をチントンシャンと提けて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
 来意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁まはなりぬ君さ僕
 白鶴に素直な父まなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀





川柳雜誌第十卷第六號目次

近作柳樽

麻生路郎選(四)

句に聽く

山雨樓・琴町路(八)

武玉川初篇研究

梅本秋の屋
森東の屋
蛭子省二魚(三)

川柳塔

麻生路郎選(九)

粒々集

五健・鞍馬・柳秀

(三)

六厘坊の思ひ出

短歌會と情歌會での逸話

木村半文錢(四)

大阪柳壇の礎石

西田當百(三)

句集の事其他

麻生路郎(四)

ペンの漫彈

住田亂耽(二)

一路集

突然

前田五健選(四)



眼鏡

福田山雨樓選(五)

愁ひ

阿部閑生選(四)

川柳家戸籍調

山雨樓(四)

西之町メモ

緑雨(四七)

十疊半に

安川久流美(五)

街に住めば

高橋かほる(五)

僕

山本三巴(五)

米村あん馬氏のプロフィール

尼緑之助(五)

高野詣弘法大師

西田艸樂(五)

地藏寺吟行

北川あや美(五)

肱枕艸紙

梅本塵山(五)

各地柳壇

(五)

編輯の窓

町二(七五)

表紙繪

大西長三郎

題字

麻生路郎



近作柳樽

路郎

選

死ぬ空想を看護婦が破り	春雨に龜が一匹浮いてゐる	思ひ出を語る二人の豆寫真	愛人の趣味に西條八十があり	會計は赤字が続く騰寫版	足袋の裏子のない家にひるがへり	畫の風呂子供シャボンの泡とゐる	勉強をなさいヨロヨロ取上げる	談判に行く帷子の糊が立ち	留守番の淋しくなれば水を打ち	ニツクネームで呼び合ふ程に酔つ拂ひ	飴玉一つころがつたまゝ故障パス
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	大
同	真弓	同	同	はるを	同	同	道子	同	同	同	大
											門

鯉ヶ池

大坂



施療院へチマコロンがとどくなり
 キツスされ相にボツクス肩を組み
 妻は居す煙草もなくて窓を開け
 進化論神はなべちやにされるなり
 金まいて其の反響のあきたらす
 論鋒の向きを替えたる五圓札
 金口を捨てねばならぬ人に遭ひ
 をとこみなきちがひじみて春となり
 ふと吹けば泡のかなしきふときえる
 パツカードそれは役所の備品です
 休職の閣下電車にぶら下り
 紹介所冗談もいふ伸となり
 エスカレーター塑像の如く並びたり
 さくらではないが手相を見て貰ひ
 いろく^くに考へぬいて見ても金
 サイレンはサイレン鐘は鐘で鳴り

大阪

同
山茶花

堺

同
同
慈雨來

豊ヶ池

同
同
噴
兒

大阪

同
利
生

同

同
青
米

大阪

同
佛
鬼
子

島根

同
同
鴉
天



兄ながらちとあてられるところもあり	失戀を賣物にして女給、酔ひ	サラリーにまだく遠いお茶屋の灯	風はなつかしい母とゆく髪匂ふ	風よ風は明るき笑みを返すなり	酔ふて來て兒どもを起す佐渡おけさ	冗談を押しつけられるように聞く	囁きへ女と女背をまるめ	陳情團一人はなれて眼鏡拭く	誘惑を待つ心なり少し酔ひ	苦情皆聞いて監督飯にする	日々狭く住んで靠れる壁があり	天井の低さ忘れる友が來る	濡れる氣でやはり軒下選つて行き	食ひつきたい様な頬して姪の來る
	大阪		島根		大阪		豊後		大阪		同		愛媛	
同	九波	同	羅門	同	野郎	同	孤鶴	同	えいを	同	荷平	同	紫雲	



講義録成功せよと云ふけれど	だまりやで淋しがりやで天井の節	靴に飯打つてばやばやして居れず	爪つんで若葉側なる人間味	あるゆうべ女の身となる鴉來る	銀狐彼女のホ、にそつとふれ	丸まげをゆはして置いて働かし	弔ひにつき合ふ人もうれいがほ	駒下駄の鼻緒素足に残つてゐる	神様の前で岡惚れしてゐる妓	なみくとつがせ魂猪口へ置き	金持の名が見當らぬ義捐金	風よ吹け吹いて櫻を皆散らせ	相談へ女の智恵が流れてゐる	握つた手のリングに生活が痛々し	あの人の過去を焚火で教へられ	
	長野		登ヶ池		大阪											
同	有為郎	同	寒子	同	ナカムラ	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
							コヤマ		勝二		菊路		木圭	同	青波	



銀狐いろんな意味の眼で見られ

大阪のマツチを擦つてサクラ號

孝行の涙隠して皿を拭き

駈落ちと知らずに道を除けてやり

アスファルト逢へると知つた足になり

事務的に戀をつゞけて恙なし

おゝ青春よ！十字をきつて淋しがり

カールもしマニユキヤイもしてお嬢さん

天師人兄に

野良歸りそのまゝ子等の父となり

トリツクにしては涙の多すぎる

お彼岸

天王寺もまれくてありがたし

すき通る唄から晴れるみかん山

屋根からも青き芽の出る春の日よ

停電へ朗らかに居る運轉手

同

同 佐津美

金澤

同 今雨

大阪

同 栗

松江

同 梟^{岩嶺改メ} 人

尾崎

同 虚白

同

大阪

同 一羊

東京

同 銀雪



夏みかん女の指のたよりなし
 長靴の子に挑まれる春の泥
 大膽にかまへる不平となつて来る
 いつ飲んでくれるか知れぬ乳をすて
 負ふた子をだしに見てゐる紙芝居
 この家も豆錠かけて夕となる
 ふり向けば自動車小さく村へ入る
 あのベンチ此の腰掛の二人連れ
 子の出来ぬ同志麻雀してゐるなり
 めぐまるゝかねだ素直にうけませう
 出しぬげに訪へば子供を叱つてゐる
 不可抗力だせめて彼女の名を書かう
 まだ死なぬ勢見せて揮毫する
 別れ来てうつろな心灯をみつめ
 鳥追の子が賞められる流行唄
 獨り者炬燵の欲しい日が續き

同	大版	登ヶ池	大版	登ヶ池	大版	登ヶ池	大版	神戸	同	登ヶ池	兵庫	長野	
堅	笛	一	一	公	無	愚	元	三	同	吞	同	同	同
	秀	美	久	平	鬼	寵	山	樓		吸	富	柳	兒
											士		
											子		



アパートの子供同志の家自慢
はてしなき想ひリンゴのまるさかな

時 床 時

「もう死ぬ」と母に甘えて見たき夜
アラモード銀座は夏となつてゐる
待ちぼけを食つてすわれば春の風
入學の光るボタンに空は澄み
後添の虚榮について行きかねる
スリツパの下は南京豆の皮
朗らかにしたのはみんな金でした
入學が許されオジヤミまだ止めず
スイスイと蜻蛉が舞ふよ死の行手
大學農園盆栽のごとゆきとゞき
電柱の工夫の上に輕氣球
金力をはじき返して淋しき夜
軍服のボタンをだいた子がいちり

大阪 鯉友
京都 波樓

島根 檳榔

松江 玲人

豊ヶ池 一沫

京都 富美三

大和 翠峯

大阪 黒天子

松江 莞路

大阪 青兒

同 洋々

京都 政一

大阪 千代吉

岡山 素木

松江 鐵花人



憂國の志士ともなりて酒を断ち
 背の子が先に玩具屋見付けて居
 可愛ゆうて叱つてやれば口答へ
 爆音へ聲を忘れたヨイトマケ
 世帯持つ其の身へふれた女給の手
 トリツクと知らず努力を謝してゐる
 女學生不器量なのがチャンピオン
 人生の永さにあかず甘諸を食ひ
 騒音を單めてデパート霞みけり
 これからと言ふは男の負けおし
 肥取りの一人五郎に似た男
 叱られる度に髭をば剃る男
 はなし有るとてひつばる男なり
 春雨も淋しき故か頬に冷ゆ
 マドロスの四月デツキにしたる也
 横顔へ家の暮しを打明けける

八幡	同	同	大阪	神戸	大阪	和歌山	大阪	愛媛	高松	西條	大阪	名古屋	島根	愛媛	大阪
十七八	新市街	夏光	小舟	裸羅庵	素月	三郎	葉光	蛙念	柳夢	狂波	風車	月茶	六郎	世都象	富士雄



ブルヂョアとプロの仲持つ金でした
 月給が泣き出しそうな交際費
 かくれんぼ好いた同志で出よとせず
 神ア 巨 鯨

友
に

無軌道に走れる君が羨まし
 松江 冬 生

花が咲いても二人の誤解とけぬなり
 鳥根 一 雄

卒業の明日から使ふコンパクト
 大阪 白 水

カムフラージュしてもかくせぬ年に成り
 同 光 男

挫折しさうだ燈明を上げよ
 同 い わ を

いゝ客と的の外れたソーダ水
 燈ヶ池 一 馬

糸口を見出せず女給と向ひあひ
 大阪 あ や 美

長いトンネルを遊戯しつゝ往く
 同 正 夫

両親へ土産の眼鏡お氣に召し
 燈ヶ池 岸 岩

滿洲みつる君へ

君心地がよいか便も遅れがち
 大阪 多 郎

襟足を覗けとばかり塗枕
 燈ヶ池 巷 巴



祖父と子の様に戯る日の續く
紙芝居一先づ子等に笑顔見せ
すき焼であるとなかろと葱匂ひ
抜け穴は抜け穴垣の竹は立ち

廣江天 人氏へ

根を下すやうに一步を踏んで行く
失戀の俺に風までつめたいか
上陸の水兵ズボンへ春の風
櫻狩もうへべレケの唄になり
隠忍のいくじなしだとさげしまれ
孫の數東京神戸門司別府
途中下車名所ではない旅靴
妻楊子後へ立つて来て覗き
市場から一升さげた友に會ひ
母の氣に添ふたる妻の地味な柄
紙芝居明日へつゞけて暮にする

和歌山

百文

大阪

可祝

小松

しとし

大聖寺

酔羊

島根

法泉子

同

青波

同

汀雨

大阪

愛子

今怡

紫陽

豊姫

南葉

大阪

北人

神戸

吉左右

大阪

公子

同

一笑

同

雨蛙



襟足を幻に見る僕を見る
 しばらくは港の女とも別れ
 落魄ふれて先祖の軸を大事がり
 女の子心齋橋へ春を告げ
 掌の眞珠さもしき金のこと
 土産物あてに子供は待つと言ふ
 仁丹とはつきり讀めて夜が来る
 髭剃つた午後を櫻の下で待ち
 妻と子へ現狀維持の辨當箱
 サイレンも嬉し緑に生くる者
 店番の欠伸へ陽射し午後の色
 反省の机の埃拂ふなり
 非常時とセ、ラ笑つたブルの春
 水をくむ女の腰のゆらめいて
 煮えきらぬのも戦法の一ツにて
 サーピスの悪い女として知られ

鳥取 香緒縷
 松江 翠句樓
 兵庫 遊歩
 大阪 坊茄子
 登ヶ池 松雨
 大阪 九文錢
 鳥根 迷朗
 京都 木公
 岐阜 銀絲
 鳥根 與詩雄
 大阪 いの助
 神戸 繁堂
 松江 赤陽
 石川 萬保
 大阪 喜由
 松江 哲緒



洋樂のラヂオに眠い父と居る
 母親の違ふ同志が戀になり
 女店員の微笑に買ったのさ
 爪を切る事も忘れて落ちぶれし
 愛のなき夫婦で金も貯めてゆき
 富を抱いて病上手な君でした
 同志會先生方にひやかされ
 喰ひ込んで居るに嬉しい新世帯
 妻は病み淋しき子等に春の雨
 鯉轍りうちの子供は這ふばかり
 菜の花をうしろに井戸水波んでる
 妻と氣まづき日漬物は鹽からし
 庖丁のおき所さへ探すたび
 誕生日鯛には骨が多くして
 ポケットが四月の俺にちとかろし
 佛心へ近づきがたき山も春

大 白 水
 同 小 松 園
 大 聖 寺 吉 祥
 京 都 香 朝
 大 阪 冬 光
 石 川 義 風 子
 堺 一 柳
 大 阪 銀 波
 同 吳 竹
 奈 良 吉 笑
 大 阪 五 樂
 同 雨 夕
 同 有 幸
 富 山 萬 二
 兵 庫 大 喜
 高 知 か て う

句に聴く。

琴 人・山雨樓
丹 路・町二

前號川柳塔より

生活へこんな鼻血を出してゐる おさむ
琴人——この句はまた世馴れぬ人が、社會へ
出て、激しい生活闘争の苦しみを訴へた句で
せう。鋭い感覺を持つてゐる、作者の感
情もよく出てゐる。併しまだ完璧されたもの
とは云ひ兼ねる、それは「こんな」とか「出
てゐる」とか云ふ文字が、此の句の境地を表現
するには、適切でないからだ、爲に句全体に
緩みを生じさせて、「なまぬるい」といふ感じ
が先づさきに来る。作者は非常によい素質を
持つてゐるが、此句は少し燃焼不足だと思ひ
ますね。

なる破調の句に感じられるのだが、この句は
逆の場合。併し僕は輕卒に十七音字に對して
疑問符を打つものではない。むしろ十七音字
は永久に生命ある一つの詩形である。たゞ、
十七音字「内容のリズム」を必須の前提とす
る場合に於てのみ、この句の場合、内容のリ
ズムの缺如を感じるのだでは内容のリズム
とは何か。それは「素材への凝視」から生れる
詩心の整然たる脈動である。
山雨樓——人物も場所も時間も出てゐない
云はゞ架空の句であるが、それでゐてしつく
りと感銘を與へる。鼻血を出した弱者への愛
とおどろきが溢れてゐる。この句を「生活へ
あんなに鼻血出してゐる」とでも直したら、
それこそ他人の冷たい眼になつてしまふ。
「こんな鼻血」と云ふ調がひし／＼と迫る力
を持つてゐるのだ。しかしそれは只に言葉の

選擇ではなくて、作者の強いおどろきかその
まゝリズムに表はれたからである。
町二——短詩表現の技として、限られた數音
字に複雑な感情を盛りとうとする際、我々は屢
々言葉の選擇に迷ふ。「生活へ」もかゝる場合
の一つの選らばれた表現語ではあらうが、「
喜びへ」「幸福へ」等々の場合と同様、觀念的
な響を多分に持つ嫌がある。併し「こんな鼻
血を」と敘し續けたところ、一句として眺め
た時、清澄さを缺くにしても、單純化にや
成功してゐると思ふ。只惜しむらくは、何と
しても迫力の弱いことである 印象の稀薄な
ことである。
これらがお通夜うどんが行渡り 没食子
丹路——前號「騒音」のなかに「從來川柳を野
卑なもの、和歌や俳句等の短詩より下等なも
のだ」と云ふ觀念を大多數の人々に抱かせた
重なる原因が此の——川柳とは滑稽、皮肉、
穿ち——であると云ふ概念であります」の數
行がある。滑稽、皮肉はしばらくおき、穿ち
とは何であるか、所謂川柳の穿ちとは、和歌
をやつてる友人が「其は俗臭を放つ理智だ」
と云つた。とにかく僕は——嚴肅なるべき通
夜に、尙且この「冷たき川柳の眼」を恨むもの

である。

山雨樓——澁い顔をした滑稽である。ユーモアの漲つてゐる句だと思ふ。川柳の本質のある一面を巧みに表はしてゐるとも云へやう。句想が陳いと云ふ批難があるかも知れぬが、それはこの句に臨む見方が古いのであつて、句主の観點は仲々冷徹に、しかも近代味を藏してゐる。おつき合ひにお通夜の眠さに戰はればならぬひだるさがかゝはれ、そう云ふ虚禮を批判する眼も動いてゐる。叙法は二段切れになつてゐるが、それが却つて面白い表現効果を收めてゐる。

町二——うまい句である。人々は恐らくかうした句に、所謂川柳味なるものを豊富に感じらう。私もまたまことにあふるゝばかりの川柳味を感じる。けれども同時にあふるゝばかりの感銘を覺えるかどうか。私がかうした句に接する度に覺えるのは、詩的リズムの乏しさである。客觀の句、必ずしも悪くはない。冷酷な客觀描寫は、その冷酷の故に、人々の心へ抜きさしならぬ主觀的投影を與へるものだ。この句それからは違ひ。

琴人——この句は如何にもお通夜らしい感じが致します。作者の老巧さが鮮やかに出てゐる、それだけ川柳らしい川柳型を成してゐる。

るので句に落着とか眞面目さが、缺けた感に受ける、併し何と云つても巧いといふことは否定出来ぬ句です。

櫻ンば掌にころくくと君思ふ 靜太
山雨樓——香りの高い句だ。甘美な惱ましさが一脈の淋しみを漂えて誘ひ來る。眞摯で多感な靜太君の映像として句にゆるみがない。先日町二君と話したことだが、登ヶ池の人の句には思はず心を撲たれるものが多い。これはほんとの句が多いからだと思ふ。ほんとの句とは何か、と聞き直る人があるかも知れぬが、そんな人につけんとして答へるよりも、靜かに登ヶ池の作家句集を讀んで頂きたいと思ふ。この句なご五月の微風に洗はれ乍ら續くべき愛誦篇の一つである。

琴人——此句の境地は誰にでも解ると思ふ。淡い感傷……病院に居る作者を知る。僕には尙更深刻に此句の境地を味はされる。句もスツキリと出來上つてゐて、厭味がない佳句と思ふ。

町二——一讀好感のもてる句である。そしてこれは感傷である。私は思ふ。詩人のうちで單なる感傷作家はごくだらぬものはない。幸にして作者は哀傷の底の苦さを身にしみて

知つてゐる。だが此句はいさゝか甘い。そして又いさゝかマンネリズムでもある。美しく繊細なりズムの流れが、この句の佳さであると共に、この句の災をなしてゐはしないか。丹路——「君思ふ」が幾分の甘つたるみを發散させてゐるもの、淡彩な表現が之を救つて句主の純情さが、うかゞえる。折角の樂しき心境ではある。僕もまた、現實とか、人生とか、生活とかに、しばらく顔をそむけて、初夏の果實を、夢の藤椅子に、愛撫しよう。そして深刻居士の彼氏くゝの假面を、青空に笑殺してやらう。

草の根の白さまつ晝間の春だ 天痴人
町二——額に汗して畑をうづ農夫の逞しい迫力を覺えさす句だ。精一杯の生長力を孕んだ草の根の生々しい清新さに劣らぬ句だ。詩感の豊富さは、プロレタリア川柳としても上乘の出來榮えを示してゐる。五月號雜吟を通じて、五指に屈したい牛句である。徒らな怒號や暴露的嘲笑的文字は、少くとも短詩に使用して藝術たらしめることは、不可能であり間違つてゐるとさへ思ふ。この句を推奨する所以である。

琴人——旺盛の春を讚美した句、感激の高潮

にまかして一氣にものした句と想ふ、其處に一才した不用意もある、それは「白さも」といふ「も」の一字だ、これが有る爲め句の迫力を削がれる。折角の緊張味が弛緩するやうに思はれる、其少しの瑕瑾は兎に角、此句は視覚の鋭さと緊張味が生命でせう。

丹路——この句のなかに、僕の愛する新らしい川柳の魂を感じる。在來の川柳味を云々してゐる間に、僕達の川柳はこゝまで來てしまつてゐるのだ。理論かさせたのではない。左翼の文藝障營内に於けるが如き、確たる指導理論として、くして、この境地へ川柳を躍進させてゆくのは何か。僕もまた遅れ走せながら「やむなき魂の叫び、生命の躍動」へ事實所謂川柳味の三要素等は、一時忘れてしまつてもいいのではないか。

山雨樓——作者は都會の誰よりも多く大自然に接觸してゐる一人だ。このきび／＼した表現に、そのリズムに作者の果敢な性格が傳つてゐる。と共に自然を溺愛する熱のこもつた眼が鋭敏に働いてゐることを見逃せない「春だ」ときつ／＼叫んでゐるあたりは、自然の成長に、その美に思はず呼びかけた人間天痴人の挨拶だ。煙と埃りと雑音とを浴びてゐるわれ／＼の容易にありつけぬ句境である。土

を踏む生活になじんだことのない者には、こゝう強く叫ばれないと思ふ。朗かな田園川柳の凱歌が響く。

前號近作柳樓より

倅せなうちを娘をやりませう 春水
琴人——海山双親の愛情が細々と現はされたよゝい句だと存じます。

丹路——「倅せなうち」の意に對して、誰が、何が、倅せなのかをほんやり考へてゐると、ふいと「倅せな」の字が「無知な」と云ふ字にダブつて來た。（これは僕の不幸である。）三原山の火口は、プチアルのぜいたくな未梢神經を呑み込んだ。

資本主義の何期かは知らぬが、時代の波に動搖する父性愛の焦慮を、句に感じて、さて啜つていゝか、泣いていゝか。

山雨樓——この人間味、この率直さ、全く肩を叩いて語りたほごの親しみを感ずるではないか。親の持つ至情といらだちが、さりげなくつぶやいたやうな口語體を通じて、泌み込んで來る。これこそちつともまざりつけない生粹の言葉である。言葉そのものが詩になり、川柳になつてゐる。も一つ云へば川柳でなくては詠まれまい言葉になつてゐる。十七字定型では國語體を容れるのに窮屈を

感ずる川柳家は、更めて、直すまい。

四二——「うち」がはつきりせぬ。「家」に「中」にか。若し前者なら詩として問題にならぬ。餘りに平凡、餘りに當然事だからだ。だが後者としても、娘の倅せなうちか、家庭の倅せなうちか、わかりかされる。それでゐて何かしら心をひかれる點のあるのは、表現法の素直さによるのだ。そしてやはり問題になりながら倅せなうちに「言葉の單純化をなしてゐるからだらう。」

槌振り上げた鍛冶屋の影が心。有爲郎丹路——純粹な詩魂は率直に對象に應える。在來の川柳を遊戯として排すると同時に、感情を、理智を、玩弄した句もまた、藝術に似て非なる遊戯として嫌ふ。句をこしらへる以前に、純粹なる詩魂を、ちかふことだ。

山雨樓——「百姓の働きぶりがほん／＼」と云ふ句があつたが、提出句の方が躍動的、立体的で描線が太い。しかしそれだけ感懐の淡泊さが眼に付き、利根的の感動に終つてゐるやうに思ふ。句から受ける感じが脆い。一面叙法の點に、尙練り直す必要があると思はれるのは、「鍛冶屋の影」の影だ。これは腕とか汗とかにするよりはましであるが、さうも印象を薄める難がある。

町二——プロレタリア詩として心をひく。影は必ずしも地に映る(若しくは壁、硝子などに)影そのものでなくともよろしい。熱鐵の前に力一杯髓を振りあげた鍛冶屋の姿、その旺盛な生命力にうたれたのである。只一言觸れておかればならぬのは「髓」と置いて「心うつ」とした表現法、狂句臭あゝとの批難が出るかも知れぬが、心をうつたものは髓ではなくて、髓を振りあげた刹那の鍛冶屋の影全体であるから差支ない。

琴人——我と我が心の隙を襲はれた感じであらう。其動機は句にある通り、途上に於てのシヨックでフト真心に觸れた感じを詠つた心理描寫の句であらう。特色のある句だ。

病床吟

しづかゝるればしづかに窓が呼吸す 噴 兒
山雨樓——澄みきつた心境の作品である。苦惱も寂寞も胸の底に落付いたときの呼吸、そして自然の呼吸と人間の呼吸とが、びつたりと合致してゐることを見出した。時のよろこびが包まれてゐる。句のリズムが弱々しい足音を示すのは、作者のかすかな喜びと沈んだ様子を落着とが、諦めに似た悟りの心象に色付けられてゐるからではなからうか。僕は僕の病床吟「茶碗の丸さのしみに満つ」を時々思ひ出して見るが、病苦と戦ひ合つたものでなくては病床吟は味はひ盡せまいと思ふ。
町二——あゝこの静寂、春の光を吸つて硝子も膨らむか窓を開けば、靜かに春が呼吸す

る。それはあるともなき微風の口付けであつた。或は作者の深く靜かな心境に、窓もまた無世の親和力を示して、作者の心の湧りに呼吸する(翳り晴れる)と解してもいいだらう。とまれ「窓が呼吸する」とは事實に於て荒唐無稽に、眞實に於て何と藝術的リアリテイであらう。最も好きな句の一つである。

琴人——靜の靜を咏つて餘す處なし。少しの無理もなく、然も作者の感じがハツキリと出でゐる。前書の通り、病床吟としての實感であることは頷かれる。自我を神の攝理へ卒直にまかせ切つてゐる姿も尊く見える。

丹路——七七五の表現方法は、この心境に緊密なる詩形と成つてゐる。沈靜した優秀な透明な詩心の怖ろしき業は、遂に、他即ち我我即ち他の境に追ひやる。窓も花瓶の一輪さしも、カーテンも、讀みさしの本の一頁も一樣に靜かな呼吸をいとなんだことであらう。内容のリズムを外形のリズムが、ヒタリと調和したとても好きな句です。

極貧へ咳ばかり出る風邪を引き 励

町二——おさむ氏の句と同様な行き方であるが、句意はこの方がわかり易い。わかり易い句が必ずしも通俗ではなく、解りにくい句が必ずしも上等だといふわけでないことは云ふまでもないが、強いて云へば「極貧へ」といふ言葉へ「咳ばかり出る風邪」といふ折角の働きのある言葉が、つき過ぎるといへる。

そして「極貧へ」といふ言葉は色々別の言葉で置きかへ得るといふ危險もある。但し決して悪い句ではない。

琴人——陰慘な感じをうけまい。極貧の「極」があまり誇張しすぎる感もいたしません。

丹路——「失業の滴ばかり白しうら寂し」——表現方法に於て、作者のカパーこそ異つて居るもの、ごちらも同様に好きな句「男は賣れぬ三疊の部屋」——これもこれも我が肺腑を突く——等の川柳が、こうした迫力をもつのは何が故か。たゞ新しい川柳詩の萌芽を漠然聲を擧げて喜ぶ前に慎重に考へて、その芽を伸ばすことを用意しなければならぬ。それには今尚多くの難問題が未開拓のままに横たはつてゐるが、それに敗北の白旗をかゝげてはならぬ。川柳詩を冒瀆するもの——それは傳統川柳でなくて、實に白旗をかゝげた厚顔なる脱落者である。

山雨樓——「極貧が生硬な言葉でいけない。この批難は誰の眼にもすぐ指摘されるであらう。それにも拘はらず、この句が、捨て難い愛憐さを持つてゐるのは、人間味に徹した滑稽の精神、握つてゐるからだと思ふ。他所事のやうに眺めてゐるやうで、内に燃ゆるものを抱いてゐるからだ。その燃ゆるものこそは誠實な人間性の中には誰れにも漏れなく賦與されてゐる塊りである。川柳は實にこの塊りを掘り出して磨きかけることに外ならぬ。眞實を詠へ、と云ふのは其處のことだ。

百姓に話の連のない車中夢人丹路——「烈風!!地を離れたる百姓や」前句の様は強烈に社會意識のある句ではないが、地味に世相を反映した哀愁味ある句として戴きます。とほげた表現と云へても決して鈍角の句でない。

滿洲車變に忘れられたる農村の疲弊——そのまゝの姿を、この句に登場した一百姓に僕は感じる。「新日本」の列車は何處を目指して突進するの。

山雨樓——この句は人間の心に喰ひ入つてゐる。僕も百姓の生れで土の香にも親しんで來たものだが、思はず頭を下げて頂戴した。

ありの儘をあるが儘に詠つてゐるのだが、川柳の精神が淀みなく流れてゐる。單に寫生とか印象とか云ふ外面的な見方がなくて、その心持に迄喰ひ入つて觀察し、暖かい愛着の精神で物語つてゐるのだ。この句から百姓のホカンとした淋しさうな姿だけを受取つたのでは、ほんとの川柳味を捉み得たとは云はれない。いきなりこの句の懷に飛び込んでその人間味に觸れなくてはならぬ。

琴人——一人別物にされて淋しく踞つてゐる姿が見へる様だ。年中都會人から馬鹿にされ蔑視されても黙々と働いてゐる農夫に同情を持つた句。

町二——百姓といふ言葉から思ひついて出た句ではないかとも思ふ。私の乏しい經驗

から云つても、一人旅でもした時、見も知らぬ他人から馴れ／＼しく話しかけられるのは、決して澄ました紳士や淑女ではなく、朴訥まる出しの百姓であることが多い。彼らは相手が傲然とさへしてゐなければ決して人見知りやせぬ。ぼつんと話相手もなく淋しさうにしてゐる百姓を見かけない私は、この句から感銘をうけることが薄いが、事實必ずしも眞實ではないのだから、以上の事實へそれも私の狭い見聞のを以て、この句の價値を判斷することは不當である。

光耀抄から

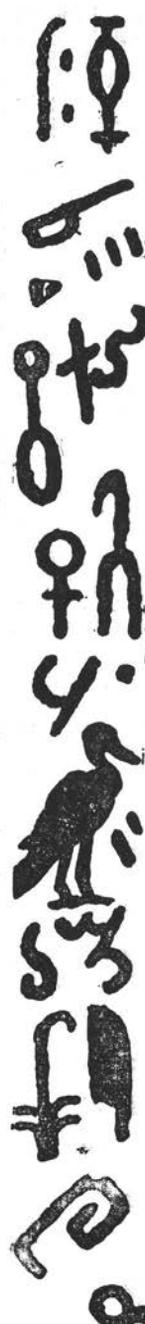
時計とめて支配をされぬ夜を笑む 機見女
琴人——男性の句としても見られる、女性の句としては強い感じがするが、それは古い頭であるからだらう。現代女性は街頭へ躍り出して男性と生存競争に飛躍してゐる時代だ。従て氣性も男々しくなり、聰明さも決して男子に譲らぬ女性が多くなつて來た。現代女性をいつまでも昔の燈心のやうな弱々しいものと思つてゐると、大きな間違を生む。若き作家も確乎りしてくれ。此句は正に川柳塔、近代柳檉へ對しての 光耀抄の意氣を示してゐる對抗句と見てもよい位だ。

丹路——この線の太いタツチには、或は男性の句だと思はしめるものがあるが、描かれた句想は、まがふかたなき女性のそれである。女性は何にも女らしい句をつくれと言ふ。

女性でなければつくれぬ句を見せて欲しいと言ふ。講談俱樂部川柳は句主の性別を問題としない。また言ふところの本格川柳は、例へ之れの問題とするとも、たゞの女らしい見付けたなアと云ふ興味と好奇心の域を越えない。だゝ私達が求める川柳こそこの問題となりあげる光耀抄の存在意義が、立證される日もさう遠くはあるまい。

町二——光耀抄にこの句を發見して、瞠目したのは私一人ではないだらう。總ての音死して寂たる時、この深夜を支配するものは、チクタクと正確に冷酷に時を刻む時計の音ではないか。つと立上つて振子をとめる。時計は死んだ、支配者は既にない。生きてゐるのは自分だけだ、今や耳はハッキリと心音を聴く會心の微笑が唇に上る。かゝる時、一個女性の魂に燃え上るものは何か。無限の陰翳と暗示を示して、女性作家のために氣を吐くもの。推奨に價する。

山雨樓——光耀抄の中で、光つてゐるこの作者の心境を示してゐる、恐ろしく主觀に徹した作品だ。女性作家特有の繊細な氣持をよく汲み取る事が出来る。句境は稍獨善的なところがあるやうだが、聊かも感傷に提はれてゐないのせられてゐるやうだが、そしてそれは決して悪い傾向ではないが、益々生活味を帯びた句境に於て想の廣さを望みたいと思ふ。



武玉川初篇研究

(三)

梅本秋の屋
森子東省魚二

(353) 胡葱は初奉公の新まくら

東魚 胡葱なますを雛に上げた日、恰も出代つて初めての奉公に來た日、其胡葱を振舞はれた日が、奉公第一夜の枕についた日だと云ふのではないか。

秋の屋 新枕は少し作過ぎのやうである。
省二 初奉公であり、新枕とあるのも……

(354) 晦日のうそに男ぎれなし

東魚 女ばかりでどうも何とも御返事の仕様もありませんと借金取を巧みに退却せしめるのであらう。

秋の屋 女蘇秦の鋭い舌鋒には債鬼も辟易して退却
省二 大三十日亭主妙手を考へた其策略かもしれぬ。

(355) なふり殺すを居代てやる

東魚 なふり殺す程のひどい人遣ひの家へ、なあに己が勤

め遂げてやるといふ氣で出代の際承知で云ひかはして勤替へをするといふ場合ではあるまいか。

秋の屋 「出代つてやる」ならば雇人であるが居代るのであるから、淫虐性變態者の妻でもあらうと思ふ。

省二 確心ある自説がない。

(356) 金にする聲はあわれな寒の内

省二 寒聲も金にするのは哀れなりで血の出る迄咽喉を破るのであるから職業上とすれば一掬の哀を催さしめる。

東魚 いたいけなシタジツ子が、やかましい稽古を強ひられる趣が連想される。

秋の屋 金屬性の聲とは此れより始まる。

(357) 拍子に乗て長崎の嘘

省二 江戸の敵を長崎でとか、長崎から強飯といふように長崎は遠い謂に用ひられ、事實江戸時代には遠地であつた。世

間咄が佳境に入りすぎ口を二らす長崎の嘘。

東 魚 〓 知つてゐる人がありとも知らず、調子にのりすぎて脱線する滑稽はよくあるやうである。

秋の屋 〓 支那、和蘭などの法螺を吹いて。

(358) 仲人の及ぬ所へたすけ舟

省 二 〓 婚約に就てこぢれた處への助け舟か

東 魚 〓 夫婦になつた後の喧嘩、仲人も取おさへ兼ねた場合ではないか。

秋の屋 〓 結婚後に發生した紛糾を、媒酌以外の人が仲裁するのである。

(359) 覗かれる氣で替女は寢に行

省 二 〓 「罪らしく替女の行水覗くなり」といふ悪戯もあるが此句は覗かれる氣で寢にゆくのだから、可愛相でもあるが、又そんな体験も充分經て居るのであらう。

東 魚 〓 覗くなら勝手に覗け、こちらはどうぞ目が見えないのだといふ心持ちと、一つには覗く程關心をもつてくれるものがあつて欲しい心持と兩方あるであらう。

秋の屋 〓 此替女は、みづから信する所が有るのであらう。

(360) 笛の上手に身を捨る鹿

省 二 〓 鹿笛は獵師が鹿を集めるために用ゆるもの、俗に女の足駄を材とする事徒然草に載つて居る。也有の木履説にも、「狩人の笛となりて口に吹かるるためしもありとや、その鹿の命を斷るは罪深き身の果なれど」とある。鹿の皮をもて製する由である。鹿はワナにかかる。

東 魚 〓 この句丈ではどうも平凡だ。前句との關聯上いい處があるのであらう。

秋の屋 〓 平凡ではあるが、纏まつた句である。

(361) 傘の初荷か着て郭公

東 魚 〓 早くも五月雨を見掛けての傘の初荷がついた。恰も郭公が鳴いてゐると時期のものを奇抜に取合せた句構。

秋の屋 〓 五月雨を云はずに、傘を持出したのが作者の趣向である。

省 二 〓 「初荷」に面白味もある。

(362) 惡女へ早く届く手招

東 魚 〓 カフエーなどでも経験がある。所謂ウインクと云ふのを試みると、飛んでもない隣のやつが早合點して、すぐ側などへ来る。チエツと云ふいまく、敷い彌次喜多振りである。

秋の屋 〓 美女は思ふあがつて、我を招くと知つても、つんと知らぬ顔をしてゐる。

省 二 〓 惡女の深か情などといふ。

(363) 津浪の町の揃ふ命日

東 魚 〓 津浪で一度に幾多の人々が死んだ。この墓も九月一日だ、この墓もさうだ、皆あの天災の時死んだのだといふ心持。全く關東大震災に思ひ及びて痛ましい限りである。この句をたゞに機智的な見付處をしたものとのみ見過すには、我々の恐しかつた體驗が、餘りにも生ましくしいのである。

秋の屋 〓 津浪の町と云つたのは、濱や村といふよりも、被害の甚大なる事が、痛切に感ぜられる。

省 二 〓 私共三人あの大震災にも無事で、かく句釋を樂しみ得る幸福を死者の靈に感謝致したい。

(364) 涼しさは男に多き糺川

東 魚 〓 俳諧名所集の記載によると、糺、又河合とも。鴨川と高野川と此所の下にて落合ゆへに河合といふ云々とあつて、

「六月十九日より晦日まで群詣ありたすのすすみと云本社北にあり」と、尙次の下鴨の社の條に述べてある。こゝで御菘が行はれたのである。この句は其糺河原の涼みを「よくぞ男に生れける」の意味合ひでから詠んだものであらう。

秋の屋二此れが江戸の地ならば瀧野川が似てゐると思ふ。

省二雁宕が糺川を詠むだ句に、「川風の幣を奪行く御菘かな」。宜申作に「涼しさや糺の人と乗合せ」。

(365) 萌し物出て生る駒込

省二川柳雑俳集などに、「蒔」とあり、最初に原本御調査を乞ふ。

東魚私二私は明かに「萌し」だと思ふ。後頁に同じ筆法の字があるから確かだと思ふ。「もやし」とよませるのだらう。そろ／＼もやしの青物が出だして駒込、青物市の賑ふ駒込が活氣を呈するといふ意かと思ふ。

秋の屋二萌しはもやしで、駒込土物店(現今の淺嘉町)の青物市場である。

省二後日私も原本をみる。萌しなる事明かなり。

(366) 内に居て顔の淋しき一月寺

省二一月寺は下總東葛飾小金の寺、虛無僧寺である。「敵討小金の宿でなりをかへ」で殊に女敵をねらつた古川柳が多い。してみれば寺に居ては何んとなう氣乗りのせぬ顔つきをしてゐた事であらう。

東魚外出には天蓋を被つてゐる、寺に居る時は天蓋を取つた素顔をさらしてゐる釋だ、それを顔の淋しきと觀察した作であらう。

秋の屋二賛成。

(367) 奈良漬の一舟残る病上り

省二一舟は奈良漬の一片の謂。病上りの嗜好も知れる。東魚病氣が回復した時分には奈良漬もたつた一舟位しか残つて居らぬ。恐らく秋の暮、初冬あたりの佻しい心掛ちをねらつた句であらう。

秋の屋二暮秋初冬などと、季節をいふ必要は無からう。

(368) 恨もなく我壘む夜着

省二心まちしてゐた者が、遂に來なかつたのであらう。東魚解脱してゐる獨者か、呑氣な樂天的な掛人か。

秋の屋二待戀ではなく、獨身者が悟つたのである。

(369) 幟かふへてなふられる妻

省二端午の幟。なぶられて嬉れしいわけ。

東魚私二私の處の様に殖えては、もうなぶり手もない。秋の屋二人に嘲られて赧い顔をするうちが花である。

(370) 錢金のおもしろく減る旅衣

省二だから物見遊山といふ。

東魚面白くへらせる金が欲しいものだ。

秋の屋二江戸ツ子が旅行の歸途には乞食をするとき昔は世に謳はれた程、徒に錢金を振り撒いてたものである。

(371) 少しつつ灯のふとく成新枕

秋の屋二結婚の當夜は燈火を暗くしたが、二夜三夜を過ぎて新夫婦の羞恥心が薄らいだので、行燈の灯心を少しつつ太くすると云ふのであらう。

東魚親二親しみの段々深まざるさまがよく出てゐる。灯が太くなるなどは憎らしい程の云ひ方だと思ふ。

省二電燈ではね。

(372) 御茶の水行舟にからかさ

秋の屋 御茶の水の風景で、廣重の繪にでも有りさうである
東 魚 雨の小赤壁、全く水墨畫の趣きである。
省 二 畫贊句。

(373) 舞も恨も初ては立膝

秋の屋 能樂で舞をまふ時には、先づ片膝を立てるが、妬婦が男の胸ぐらを取る時にも、又さう爲るといふので「初て」は初手である。
東 魚 立膝は全く日本の特異な情味がある。歐米の片膝相敷いたのとは一寸味が違ふ。舞と云つて轉じて恨みもとは、實に痛快な程な諧謔味だ。
省 二 立膝の史的研究をしてゐた人がある。

(374) 憎そふに手曳は日向通りけり

秋の屋 此手曳は、檢校などの手を曳く男で、主人に日蔭を通らせ、自分は炎天の日向を通る故、自然主人を憎むやうな動舉をすると云ふのであらう歟。
東 魚 此の強慾者めがといふ心持、主人だから仕方がないといふ手曳の心持が、日向を通る動作に覗はれる。
省 二 意味は通じるが、此句をもつとイカすには、前句を知らねばなるまい。

(375) 子の手を曳いて姿崩れる

省 二 美しい姿、かたしが崩れる。「子の手を曳と年の寄る妻」(ム八)との句意も、同時に考へ添ひて置くべきだ。
秋の屋 美しい人妻も子をもつては、相場が二三割下落する
東 魚 姿勢の崩れる事もさることながら、衣裳の着崩れる意味も含まれてゐやう。

省 二 此の崩れる姿にも亦別趣の美しさは見逃したくない氣がする。「子を抱てゐるも姿の餘情なり」(ム十八)で。

(376) 我炭にかじけて歩行八王寺

省 二 武藏八王子の木炭は有名であつた。和漢三方圖會にも、堅炭、武州八王子秩火云々とある。(八王子の炭の句はいろく)後出する)
秋の屋 歌舞伎十八番の「助六」の白に、「遠くは八王子賣炭の齒缺爺、近くは山谷の古遣手云々」とある。
東 魚 暖をとり得べき炭をもちながら、かじけて歩行と云ふ點が句の山だらうが、句から受ける感じは説明する程、理窟つばくはない。

(377) 鷹の頭巾を拾ふ買出し

省 二 眉斧日録「鷹の頭巾を落す木がらし」鷹狩關係のやうに察せらるるが、不詳。
秋の屋 私は幼年時代に、自宅に近く御鷹部屋が有つたので鷹匠が鷹を据えて歩くのを見たが、鷹に頭巾を着せたのを、嘗て一回も見た事がない。此句の「鷹の頭巾」は鷹匠頭巾の事ではない歟。それとも別に鷹に着せる頭巾があつたもの歟。再び按ずるに「鷹野頭巾」であらう。

東 魚 私には夜鷹の頭巾といふものかと思つてゐた。(夜鷹は大抵手拭を吹流して被つてゐるやうだが)
省 二 此句、後日の研究に俟つ事として、鷹匠頭巾の事、守貞漫稿に「ほくろ頭巾、織田信長著す、尤も古き製也、苧を以て作る故に苧屑也。元文の頃迄は山家の者多く用之、鷹匠など用之も田家の者と鳥の見違ゆる爲に仕たる物歟、云々、今世は鷹匠も不用之、木綿頭巾を用ふ」今世鷹匠淺葱木綿也。今紺木綿手巾縁の物にて頬冠するものなり」岡田健之氏の「鷹狩秘話」に「獵場にて三四十間乃至五六十間の距離に鷲を發見し

たときに鷲と鷹使として三角形を描くやうな方角に、ざいを持つた手明を配置する、そして手明がその地位についてたとき、隼の頭の紙袋を去つてやる」此の紙袋は頭巾に類するものなのであらう歟。——鷹に頭巾のあつたと察せられる古俳句「あら鷹もその鷹匠も頭巾哉」(朱廸)。「旅を行く鷹も頭巾や不二風」(涼菟)

(378) 煮あかる湯をたます茶袋

省 二 煮たざる湯へ、番茶を包むだ布袋を入れると、暫く湯がおとなしくなり、そして煎じられる。

秋の屋 湯をたますは、少し變な詞である。

東 魚 幼兒などの怒つた場合「だましますかす」など云ふから、湯のたぎり立つた處を緩和する意味合ひであらう。

(379) 辛崎やあたりの松は氣も付す

省 二 辛崎は一ツ松本位である。又實際あれ程壯大なれば他へ氣をやる餘裕も出ぬ。

秋の屋 異議なし。

東 魚 それつさりの句だが、「辛崎や」と置いた處に詠嘆味を深くした手際はみとめられる。

(380) 近星を佛御前は知らぬふり

省 二 近星出現すれば悪事ありといふ。やがては佛御前も佛門に入った。

秋の屋 近星が顯れると、大臣に憂ありと云ふ古い俗諺があつた。近星は月輪の附近に出る星の事である。此句は平重盛の薨去をいつたものであらう。

東 魚 總て減ぶべき運命の平相國と知らぬ顔にとの意ではないか。

(381) 淋しい時に藏を詠る

省 二 夕日が落ちて藏が列むで居るのは、物靜にして寂寞な感がする。心いかに淋しさを抱いてゐた時に、不圖藏を眺める。情と景が一致しては一層淋しい。

秋の屋 此倉庫も頓て賣物になるのだと、持主が淋しく詠めるのではない歟。

東 魚 極めて俗に考へると、禁足を喰つてゐる息子などがこの藏が自分の自由になるならなア、とぼんやりつまらぬ事を考へる場合なども想像されやう。

(382) 油のはねる忠盛の袖

省 二 白河上皇にお伴して祇園社參詣の或夜、途に怖しき者、火を吐き進むをみて、忠盛を捕ふれば、僧が麥稈を笠となし(古川柳に「こんな等よせと忠盛呵りつけ」)、社頭に灯を捧げるのであつた。袖に油のはねた事であらう。

秋の屋 句意明瞭。

東 魚 縛り上げ忠盛様で手を洗ひ、だから御尤である。

(383) 落る事なくて淋しき牛の角

秋の屋 有角獸の中でも、鹿は毎年その角が脱落するけれども、牛は斯る事が無くて、却つて角の有るのが淋しい、と云ふ句である。

東 魚 これも説明すると理窟めくが、直接軽い諧謔をうければよい。

省 二 老牛の角は見た眼に、頗る物淋しい。

(384) 百取うちに濡くさる釋迦

秋の屋 四月八日の灌佛會に、一文二文と參詣人が上る賽錢を、百文取上るうちに、釋迦の像は甘茶に濡腐るのである。

東 魚 〓 お釋迦の誕生と云ふ例の物貰ひの方ではあるまいか
省 二 〓 私にはどうも判然としない句の一つなのであるが、
錢臭い茶などで甘茶關係かとも思ひはした、が。

秋の屋 〓 願入坊主のお釋迦の誕生であると、濡くさるの解釋
が出来ぬ。此お釋迦の誕生といふのは、岡持のやうな桶に、釋
迦の木像を立たせて、それを手に提げて來たが、桶の中に甘茶
も水も入れてない故、決して濡れ腐るはずが無いのである。

東 魚 〓 百取るが願入坊主らしく思はれ、又願入坊主のさげ
てくる釋迦へ、甘茶をかけた錢をやるのだらうと想像してゐた
のであるが、御教示で、そんな事はせぬのなら又再考せねばな
らぬが、どうも百取るが自説らしく思はれてならぬ。

(385) 朝顔の開き仕廻へはほんの帯

秋の屋 〓 盆踊に縮子帯とでも云ふ意歟。

東 魚 〓 「本の帯だと思ふ。寝起の細帯姿で朝顔をみに庭へ
下りてみたが、皆聞き切る時刻には、ちやんと着更へて、帯も
きちんと結んでゐるのであらう。

省 二 〓 本の帯である。
秋の屋 〓 自説取消す。

(386) 死た妾に繪師の骨折

省 二 〓 妾繪を描く苦心。妾であつて複雑性が出る。

秋の屋 〓 大名などの寵妾であらう。現今ならばデスマスクを
採るところで有る。

東 魚 妾だけに繪師の怨氣も想はれる。

(387) 勘當の長崎者に成かかり

省 二 〓 徳川時代の長崎文化を想ふ時に、長崎者なる言葉に
は異様の耽奇味がある。

秋の屋 〓 勘當されて長崎へ行くは、士人の子息であらう。而
して放蕩者でも、將來出世する目的で、學問をする爲であらう
と思ふ。

東 魚 〓 「成かかり」に、尙江戸を忘れ切れぬ心持ちが窺はれ
る。

(388) 一夜明ると馬鹿て目を穴

秋の屋 〓 此馬鹿は、三河萬歳、歟それとも屠蘇を過せる酔漢
歟。

東 魚 暮の眞劍さに對しては、萬事が馬鹿にみえる心持ち
か。

省 二 〓 眉斧日録初に、「元のたはげに戻る元日」

(389) 殿の禁酒に夜へ捨り行

東 魚 〓 原本は明に「夜は」である。殿様に禁酒されては、
取巻き連の近侍たちが花やかな夜を享樂する事も出来なく、御
殿の夜は寂しいものにするたれて行くとの意である。

秋の屋 〓 佞臣の身が癩るばかりでなく、愛妾も又頗る手持不
沙汰であらう。

省 二 〓 先づ禁酒から……である。

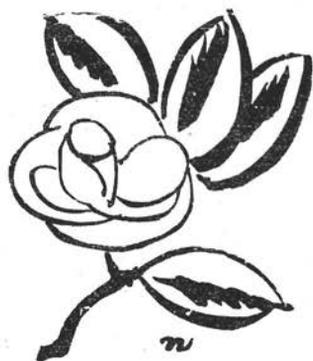
(90) 浪人は娘ひとり智慧の奥

秋の屋 〓 歌舞伎劇によくある筋らしいが、奥とは。

東 魚 〓 近頃流行の言葉で云へば、最後の切札の意味合ひで
あらう。

省 二 〓 父ひとり娘ひとりの浪人には、力と頼むは娘である

借金にせつば詰つて娘は身賣の覺悟、浪人はしても刀の手
前、といふ筋書はよくある。



川柳塔

路郎選

吉田水車

我委枝に残りし花に似て
 山上のホテルに深し球の音
 春の野は牛に委せてあるもよし
 約束の如く蛙の鳴き初め
 青訓は軍歌ばかりで花の山
 雑踏へ頭の上で子を渡し
 春光へしばし水車は忘れられ
 うがひする如く蛙のしきり鳴く
 好奇心それも視察と申すなり
 阿部閑生
 今しがた何考へてゐたる我
 日に月に言葉少き父となり

蜘蛛壁に出て壁と根くらべ
 氷囊におが屑浮いて影をもち

入院 (五句)

まがつ日の白百合眼一杯に揺れ
 手術臺わが身ばかりの幅に出来
 薬瓶名札の一字違ふまゝ
 物干に私の寝着もひるがへり
 田蓑橋妻の訪ひくる窓に倚り

福田山雨樓

四天王寺にて銅像所見

親鸞の仰げば酒もいける相
 戀猫がさつさと裏を通ります
 大手術扉の空気が凍つてゐ
 女に溺れし男笑はず

隣の盗難

泥棒に隣は赤ん坊の家
 おれの氣にそぐはぬ靴の鳴皮や
 道樂の嵩む欠伸と見てとられ
 ベンが重たい戀もないのに

朝田新水

渡し舟暫しが程を親しまれ
 次の間を開けてもセコンドだけの夜

一人子の貯金に親は手傳ひぬ
潰す潰さぬ二代目の腹
辭令一枚凶作地へやられ
眞白く乾く夕陽は落ちる砂利を踏み
鱧の皮妻はそれとは云はぬなり
青竹の籠になる日が思はれて
楊井 二南
若葉 若葉心がおどる許嫁
いきさつを知らず口出し止め給へ

地下鐵を出ると淺草はやし立て
看板に疲れ淺草路次を抜け
靖國神社

遺族 殊更順を争はず
松盛 琴人

春の辻用もなく来て又曲り
祝ひろし氏の結婚を

上々 吉日の花嫁よ花聲よ
信じきる妻は茶漬で濟しとき
細帯も梳髪もゆるそ病上り
辻折れて親といふ氣をとりもどし

住田 亂耽
萬歳師同じ話術の良に生き

金銀複本位しきりに論ぜらる
銀の共演で一幕濟ます氣か
あることがわかつた羽織ぬぐと唄
橋本 綠雨

戎橋こつち寄れと云ふ人に合ひ
鯛すしに一人旅とは淋しいね
日々のことがうるさし二階借
關本 雅幽

櫻散つた跡わたしのこゝろよ
向きが遠ふが皆口開けて眠り居る
肋あらはぬ此の現實を如何にせん
岩崎 柳路

宿直へタイムスタンプ丈けの音
ヨイヨイの女給に袖が邪魔になり
坑道へ苦力少さく消へて行く
竹内 機見女

あてもなく来てアスファルト盡きてゐる
西村 明珠

起重機が人も釣つてゐるいそがしさ
忠告をする目の前に花が散る

あけ暮れを共にゐる母はつとかれ
胸に手を置けば子の事、馘の事
頬杖もいつか吾が身のものとなり
慾望と一緒に山の手を歩るき
停電に男は樂に寝轉り
夏來れば夏へと母が油斷せず
寢言とは父あまりにも不甲斐なき
ドウナツをどこから食へばお行儀だ

姫田 夕 鐘

ふるさと山はかすみの切れたとこ
撥だこに洒落も少々わかりかけ
愛の巢は長居をけなし夕餉なる
色彩は下町好み花の下
京の春うちむらさきで暮れかゝり
逢ひに行く足に小砂利がまとひつき

平 岩 司 郎

ときめきに下駄はきちがへ迎へたり
夏めく日風船割れた兒の笑ひ
爆笑の後へ頬張るビスケツト
口とんがらして翳焼いてる
教室はロイド眼鏡と光る椅子

水 谷 鮎 美

しやぼてんに心みられてゐたりけり
妓のたばこ鼻のあたりがさびしいぞ
教師の咳に雨は激しき
鼻とがりゐるたり昨日の心かな
髪のはすことあきらめのひとつなる

市 場 没 食 子

きそくたつ店とは見えぬ鈴蘭燈
ニンニクの息を受付け嗅がされる
添乳して圍はれ者を歎じ
長居して人の悪口にもおよび
肩上をつけて男かへたとさ

岩 垣 日 本 村

大將と同じ姿勢で馬丁行く
造幣局通り抜け

通り抜けても金貨は見へず
蚊にすればそんな氣もなく子をねらひ

手 島 君 へ

夢でない夢も面白かるう君

須 崎 豆 秋

面憎いほど妾宅がならんでる
奥の間でサービス振りへ氣をつかひ
筈の賣りのこりたる廓の灯

メーデーへ飴ねつてゐる松屋町

日野華水

東京見物 (三)

丸ビルの窓を數へる指を出し
雷門バナナの皮にすべりかけ
ジャズかけて二人のコート揺れてゐる
お所化さんしびれされる頃に立ち

石曾根民郎

嵐山

河風に髪散る戀もあやからず

大阪の別離

見てあればしきりにそぐ灯も雨も
まぼろしを絞り出したるちくおんき

首藤竹楓

鞍馬天狗途切れ途切れの花盛り

人の世のあはたゞしきを知る宵寝

女氣のどこまで男をうたがうか

妹尾變人

野球する爲日永になつて欲し

久しぶり逢へば悪口たんとあり

金のある顔で電車にのつて居た

一反歩二反歩利子の要る金だ

メーデーの警察力を見てもどり

野に花の笑ふに君の姿なし

奈良井柳人

麥の穂と男の子とに陽が當る

乙女らに春のお月様薄曇る

尼絲之助

春は近所の噂の中にマゾヒズム

あほぞらを半日ほどもみてゐたき

生田翠夢

千秋と云ふ逢瀬をばうち黙し

観づれば矛盾だらけでいふなり

河合紫石

あはよくば社長になれるタイプなり

新館の晝へまばゆく通される

石森靜太

新緑へ僕はお金がありません

バースコントロールの話春の風

熊谷紅

もう去んで寝たまへ通夜の酒の酔ひ

よこしまな錢とは知らず女惚れ

粒々集

一路郎選

大學を出て来た爲の失業苦
五升酒飲んだ勘定にされてゐる

五彩をあびておゝあが
江戸みつる

あや美氏より櫻花送られて

せめてもと櫻花を入れた手紙が來
村松夢裡

失敗へ蔑すむ眼丈けとなり

交渉へ素氣無き態
荒井英賀夫

どうすればいゝかとヒスにさからはす
鯉のぼり風の無いのはぶらさがり

春の雨時計がとまりそうにうち
松下小柳子

卒業して制服でまだ遊び
春元紀太

ヨウ／＼の容でテリヤを連れ歩き
奥野禿山

行員の指に紙幣は躍れども
岸上錦石

町議戦こゝも文書の空手形

風あるやなし咲き盛る白牡丹

慰めを聞く鏡臺の灯のにじみ

眞心を知つて金に見返へされ

附近に心中流行

改札は天國行きと知らず切り

女事務帯を結ぶと歸るなり
東京富士野鞍馬

出納は紙幣を並べて部署につき

貸付にしほくと來る旦那なり

姿見へ蒲團の柄が映る宿

御祝儀へコソ／＼と禮を述べ

巻紙へ書くとあはれな學校出

無常とも響かぬ大悲閣の鐘

嵐山

高のしれた金がたまつて犬を飼ひ

思ひ出も段々うすく年をと

はたで見る眼に小寶が有る斗り

寢白粉男の顔を長う見る

醉ふて居る指にからまる靴の紐

萬一を案じて云ふに齒をせゝり

六厘坊の思ひ出

短歌會と情歌會での逸話

―彼は誰かに殴られずに濟まなかつた男だ―

木村半文 錢

六厘坊の二十五回忌に當りまして、川柳雜誌社が特に「六厘坊忌」を開催せられ且つ多數御出席下さいました事は、六厘坊もさぞ地下で感謝してゐる事と存じます。不肖私、六厘坊に代りまして厚く御禮申し上げます。

さて何からお話していか分りませぬが、或は故人を侮辱する様な話になるかも知れませぬが、なるべく正しい史實的なお話をして、後世史家のために遺る様なお話を申し上げたいと思ひます。故人の一身上の事は、他の方からお話がある事と思ひますが、多少申し上げたいと存じます。

六厘坊は本名を小島善右衛門と稱しました親しい間柄では善之助とも申して居りました。父は小島善五郎と申し洋服商を營んで居りました。一時小島銀行を設立された程の有力者で、現在の言葉で申しますならば、ブルジョアであります。生家は市電停留所の御池橋西側南の角から、西へ一丁餘の所にありました。

六厘坊は善五郎氏の實子ではありませんが、正妻の子では御座居ませんので、同家に奉公してゐた下女が實の母であります。しかし六厘坊の養母が、貞儼な賢明な方で、實子以上の愛を以て育てられましたが故に、世に所謂繼子根性、ひねく

れ者の性格等は全然ありませんでした。之は六厘坊が天性剛腹な性格に基くものとも思へますが、實に養母の徳育の力であつたと存じます。學業方面は小學校時代のことはわかりませんが、市岡中學を四年頃で退いて居ります。之は國文學の教師と争つたからだと聞いてゐますが、深い事情は川上日車君でないと分り兼ねます。

六厘坊の自宅は御池橋にありました。洋服陳列場は、心齋橋の現在の駁々堂とうどん屋との間の二軒を合併したもので其處に二十一歳まで居つて、二十二歳で死ぬる少し前十合呉服店の向側に別家され、同じく洋服商を營み、病に罹つてその二階で靜養、後魚崎へ出養生し、また歸られて一、二ヶ月してその別家で死なれたと記憶して居ります。

六厘坊が死んでから、墓を一心寺に建

立すると云ふ事を家族の方から聞きましが、その後家業が思はしくなかつた模様で、一心寺には彼の墓は御座居ません其の後何とも聞きませんが、お父さんの墓は天王寺にあります。天王寺に参ります度に私は六厘坊の墓に等しいと思つてこの墓に詣でるのですが、西門の北一丁の門を東に入りますと左へ三四十歩の處に一群の墓があります。その墓の前は空地で、突當りに女の墓があつて、その横に大きな碑がありましてそれが善五郎氏の墓であります「善五郎翁の碑」といふ銘があります。西區の有志が小島會を設立されて建立されたものらしく、裏に貳拾名ばかりの名が列記されてゐます。或は同業者の方達か、或は一時市議選舉に關係された事から政治關係の人達か、分りませんが、小島善五郎氏の徳を讃える人々によ



天才六厘坊は十六の時こんな顔をして居つた

廿四六厘

つて建てられた記念碑に違ひないと存じます。でお父さんの墓はありますが、六厘坊の墓はないので、何かの機會に、皆様の力で六厘坊の碑を建立して戴きたいものと存じてゐます。

設けて、盛んに狂句を發表してゐました頃、(私も投句者の一人でありました)故人は大阪新報に柳壇を設けて(彼の十八、九歳の頃です)劍花坊、久良岐氏等の説によつて稍川柳の本質に近づいた

六厘坊の性格の一端をお話し致します
明治三十七、八年頃でした、堂島濱通の大阪日報——現在の關西日報の前身でその頃から赤新聞ですが、それに選者が東夷——佐藤紅綠氏と思ひますが、真相は不明です——が浪花樽と稱する柳壇を

の句を發表してゐます。最後の句は斯く云ふ小生が「のつべら坊」と稱して發表したものであります。小生は其後「寒浪」と號し「半文錢」と改稱しました。それ以後六厘坊に私が敗けて提携した

第し

六厘坊四拾五入にて及
打ちなし
馬鹿

新らしい見地より、浪花樽が狂句である事を指摘して盛に攻撃したのであります。その頃の句に東夷トンチキ(何とか——)テケレッツツのパがあります。で浪花樽でも挑戦に應じて六厘坊天寶錢より二厘

のでありますが、六厘坊が打つた網に私共が救はれた結果になつて居ます。浪花樽には當時錚々たる作家が生れてゐるのであります、清新な句を作つた多田水平坊——築港方面に居住の由聞いて居ります。二三年前に會つて中風と聞く中村喜月、番傘方面では篠村力好、今葉常坊それから小生の従弟の吉重只英、小西屈突坊、同じく舍弟の小西徳松等があります、何れも日報から生れ六厘坊の川柳に狂句の連中が全部白旗を掲げてその旗下に參じ、葉柳に入つたのであります。

其の後六厘坊が私に「浪花樽の連中は實に怪しからん 彼等は僕の市岡中學の事まで詳細に調べてゐる。大阪日報へ怒鳴り込んで謝らさうと思つてゐる。」と云つて大變憤慨しました。六厘坊は

六厘坊四拾五入にて 及第し

と云ふ僕の句に對して怒つてゐたのでして、その理由は故人は英語が不得手で零點が多かつた。その爲に假及第の浮目を見てゐたので、そんなこと迄調べて人身攻撃に利用するとは怪しからんと云ふのであります。で私が「實はあの句は僕

が作つたんだ。併し決して學業成績等は調べない。たゞ六厘坊の六に對するかけ言葉で、つまり狂句にすぎないんだ」と説明すると腹をかへて笑つたのですがあれが眞實なら、彼は日報へ怒鳴り込んで、左叫——大阪日報を止むなく關西日報にさせた發頭人——ハハ白眼君に陳謝させた事でありませう。

短歌會でも彼は一つの挿話を殘して居ります、現に大阪から發行されてゐる趣味雜誌「上方」の一月號明治文化號、寺川信氏が明治末葉の短歌會の動勢と題して大阪に始めて公開された短歌會の事を記載され、また二月號に桃涯氏がそれを反駁して「大阪の短歌會を公開したのは大阪日報を中心にして明治四十一年四月頃が最初であつた」とありますが六厘坊が出席したのは明治三十九年の春、前田水溪氏が來阪されてその歡迎會を兼ねて樋口車童氏が難波、八阪神社の境内で開かれた短歌會でありました。その他に高津の藪田涙浪、堺の岡夕風、西村菜花、茶白山の森白鬼、等十三人の出席者がありましたが、その短歌會の廣告を見て

六厘坊が參りましたのは午後三時頃、皆の中へ御免!と云つて入つて來ました支關の所で「私 小島魔王と云ふものです」とジロ／＼見廻して、彼は少し近眼でありましたやがて私の顔にぶつつかると、ヅカ／＼と私の傍へやつて來ました兼題は「ほととぎす」で席題は「流人」でしたが、六厘坊も兼題を持つて來てゐました。それを出すまでは無事でしたが詠草が集まりやがて選、披講となるのですが、未だ選者も選の方法もきめられてゐなかつた。順序から云へば、前田水溪氏が藪田涙浪氏がその任であつたのですが突然六厘坊が「何うして選するのでか」と發言したのであります。水溪氏は溫和な人ですから「未だ決つてゐません」と言つた處が、未だ二十歳そこ／＼の六厘坊が多數先輩をさしおいて「では僕が披講しますから、氣に入つた歌があつたら言つて下さい」と宣言したものです。傍から私もとめたのですが、六厘坊は自分の思ふ通り一人でどし／＼披講して、一句々々批判してやつてのけたのです。皆煙に巻かれてしまひました。その時分

の歌人は溫和しかつたのですが前田氏の一首に葉すれの風の語に對して「葉すれの風とは葉がすれる風か、葉木の風の意かと質問したものです。前田氏はニコニコと笑つて居られました私が私は「前者の意であらう」と云ひますと、六厘坊「そんな風があるものか」と實に慘酷な批評を、しかも當時賣出の前田氏を前にして二十歳に滿たぬ彼が子供扱にやつたのです。六厘坊は斯う云ふ一面を持つ剛腹な男でありまして、實に徹底したやり方でした。その點路郎君も少々類似しておりますが、とても猛烈でさうしお人柄が寄り集つた短歌會の席を一人でひつさらへて歸りました。恐らく彼は將の將たる器であつたらうと思ひます。

これと逆に彼がひどい目にあつた話があります。情歌會（都々逸）のお話ですが——六厘坊は葉柳にも「葵」の名で情歌を發表した事があります——やはりその時分で、平瀬蘆江の高弟の田中芳哉園氏（大阪では第一人者でした）の情歌會が、南地法善寺の二鶴でありました。參

會者は所謂通人連中、御馳走を前にして若い處で三十歳前後から、五十歳位の年輩の人達、十四五人の集まりへ若い六厘坊が、木谷ひさご——父は有名な竹本彌太夫、兄は近松研究の木谷蓬吟、六厘坊七厘坊と共に市岡中學の川柳三羽鳥の一人——と出席したのです。これも廣告を見て行つたらしいです。最初は無事であつたのですが、どんないきさつからか、情歌を批評し合ふ段になつて、錚々たる連中を前にして六厘坊が實に野放圖な放言を發したるために、争ひが起り、この小僧生意氣な、と云ふわけで誰かが傍のものをとつて投げつけ、それが六厘坊に命中したのでありました。何をする！と憤慨した六厘坊も上立り、總立ちとなつて、今までなごやかな席が忽ち混亂、活劇の場となつたのであります。田中氏もとめられたのですが、なにしろ酒が廻つてゐるために、席は目茶々々に潰れ六厘坊も散々殴られたのです。

そんな事があつてから二日目、私が六厘坊を訪ねますと纏帯してゐて「折角い

ゝ事を言つてやつたのにふくろ叩きにしやあがつて、告訴してやらうと思ふんだが、虫をこらへてゐるのだ」となかく憤慨してゐました。

短歌會の時は皆が溫和しかつたので殴られなかつたのですか、情歌會の時は、人格の低い人とはなかつたのでありませうが、何しろ一杯飲んでゐた處へ、若い青二歳と見られる六厘坊が野放圖な放言を發したために、癩癩が破裂して大活劇になつたものと思ひます。何しろ言ふ事が實にテキパキして一步も譲らず、相手がギャフンと言ふまで論戰してへこたれない實に徹底した、剛腹な男でした。麻生君にもその傾向があるやうに思ひます。

ですから六厘坊は晚かれ早かれ誰かに殴られてゐたであらうと思ひます。さう云ふ人間に彼は出來上つてゐたのです。

とりとめのない話になりました恐縮ですが、前座をひきうけまして、六厘坊二十五回忌の追憶談と致します。（丹路葉也）

大阪柳壇の礎石

——六厘坊は商賣氣もあつた——

西田 當 百

私は六厘坊が撲られさうで助かつた話を致します。明治三十九年頃久良岐氏が大阪へ來られ、渡邊虹衣氏の下宿で歓迎會が開かれた時（その席には久良岐氏を初め、虹衣、百樹氏等の大家連が顔を揃へてゐたのですが）六厘坊はのこ／＼出かけて行つたのであります。結局句を作ることになりまして「月のうそ」と云ふ題が出されました。これは當夜六厘坊が大家連を向ふに廻して盛んに議論をふきかけまくし立てるので、大家連もぐつと癪にさへ、何かこの青二歳の知らないことを持ち出して奴をへこましてやらうと云ふ下心から、吉原の古いことなんか出したら困るだらうと云ふので、斯様な題を出されたのであります。すると六厘坊は憤然色をなして、そんな古臭い題は時代錯誤も甚しい。と眞向から攻撃を致し

ました。しかし此の場合は大家連が自重されたので幸ひ撲られずに済んだのであります。が、はたで見てゐた人達に汗を握らせたのであります。後日彼は私の京町堀の家へ訪ねて參りまして「先日久良岐にに會つて盛んに攻撃してやつたが、實は一月の嘘——なんてことは知らへんのやつた」と云つて呵々大笑しておりました。

當時は東京に久良岐派、劍花坊の柳樽寺派、而笑子の讀賣派が相對立して、斯界を風靡してゐたのであります。そして川柳とは江戸詩である。吉原中心の詩である。贅六にはわからん等と揚言してゐたのであります。それに對してまだ二十才足らずの六厘坊が敢然起つて、何、川柳は社會詩である。江戸の眞似なんかする必要はないと、堂々と大阪の川柳の爲

めに虹の如き氣焰をあげたのであります。その立派な議論は今も尙傾聽すべきものがあつたのであります。左様に六厘坊は豪腹な男で、眉の太い、眼、鼻、口の大きい見るからに豪傑張りの人相をしておりました。その議論のはげしさと云つたら流石の路郎氏もへこたれてゐられたのであります。言葉もきび／＼してゐて、大阪生れには珍らしい程イエス、ノーがはつきりしてゐました。兎に角六厘坊は大阪に川柳の基礎を作つた功績者でありまして、川柳家として等しく感謝の念を捧げねばならぬと思ひます。

六厘坊が今日生きてゐたらどうなつてゐるだらうか。と云ふ事を考へて見ますと、立派な實業家になつてゐるだらうと思はれます。或はそれが爲に川柳を捨てたかも知れませぬが、彼は新聞を作ると云ふことはよく言つてゐました。懸賞に當選したこともあり仲々文才がありましたが、新聞記者ではなしに、新聞經營者になつて新聞の一つや二つは出してゐた

だらうと考へます。當時と雖も新聞の勢力は大したもので、何をやるにも新聞の力を借らねば成功しないと云ふことを六厘坊も認めておりました。文學青年と云へば多く商賣の方は嫌ひなものです、六厘坊は矢張り商賣氣を多分に持つておりました。その頃は洋服のリーダーモードと云ふやうなものはなく、一々注文をとつて巻尺で寸法をとつたもので、六厘坊も店へ出ては氣前よく「お出でやす」と頭をさげてよく手傳をやつてゐました。風采を飾らぬ男で、ぼん／＼と云ふよりか商人らしいところがありました。

川柳に限らず、俳句でも、情歌でも何でもやる。自分から天才と稱するほどで大變器用な男でありました。

當時東京に日本新聞と云ふのがあり、その新聞社には子規がおりました。鳴雪の選になる俳壇があり、劍花坊の選になる柳壇がありました。大阪には大阪新報と云ふ新聞に柳壇がありまして、六厘坊が選をしておりました。私はこれに投句

したのが機縁となつて彼を知つたのであります。六厘坊は劍花坊の柳樽寺派であり、私は久良岐氏の縁故が多く五葉、半文錢君は讀賣派といふ風でありましたがそれ等が大阪新報の柳壇を縁として一つに合同し、東京に對抗しておつたのであります。

近く六厘坊の句集を出される計畫があまりさうで、その材料が散逸して困つてゐると云ふお話を承りましたのであります、それについて申上げたのは、六厘坊が如何に天才、鬼才であつたにしましても、漸く二十二才で亡くなつたのであります。若かつたと云ふ事は拒めないのでありますから、句集が出た際（どう云ふ句がのるかわかりませんが）案外つまらぬものがあるかも知れませぬ。

作句の早かつたことは眞に驚くべきものがありまして、半文錢君も早かつたが同君が五句作る間に二十句、三十句も作ると云ふ風で腕にまかして作りつ放しておりました。水滸傳を讀んで、讀んでゆ

くおとから直ぐ句に作つたと云ふ逸話もあります。議論はなるほど堂々と立派でありましたが作品の方は一つ未完成のものが多かつた、と云つてよからうと思ひます。あれで三十四と生きてゐたらば圓熟したものを出したに違ひないと思ひますが。ですから句集が出た際はさう云ふお心持でお讀みになることをお含み置き願ひます。

また句集を編纂される方々に一言申上げたのは、模範的な句を集めると云ふよりか、明治三十八年乃至四十年頃の時代相を表はすもの、又は句に依つて六厘坊の意氣、才氣を見せると云つたものを選んで頂きたいと思ひます。才一邊でどん／＼作ると云ふやり方でありましたから、六厘坊が今若し生きておれば、句集など出して呉れては困ると云ふかも知れません。兎に角さう云ふお心持で編纂され、又御覽下さるのが六厘坊に對して、忠實な遣り方であらうと思ひます。

句集の事其他

——六厘坊忌に際して——

麻生路郎

六厘坊廿五回忌に當りましてかく多數御參會下さつたことを有難く御禮申上げます。半文錢、當百兩君の話を聞きまして當時を追憶泪新たる感があります。そして今日まで生きてゐて呉れたらなあと思はずには居られません。併しその痛快な逸話を思ふとなく／＼涙どころではありません。私にもそれと同じ様な話が多々あります。先刻からのお話の様には何處へ出かけても無鐵砲でありました勿論時代が時代であつたから許されたもので今日なればきつと誰かに撲られたでせう。實に彼は剛腹そのものでした。私は彼と同年ですから性質は似てゐるでせう。併し私と彼とは生立ちが違つてゐます。私の方はおとなしい學生であります。彼は學校を出た洋服屋の若旦那（と云ふよりは寧ろ丁稚の兄貴）でありました。かく境遇が異つてゐます。私は勉強時代彼は既に世に出てゐる、この違ひから同年卒ら私は彼に教へられたのであります。夏目漱石が面白い、草枕を讀め、或は齋藤綠雨が面白いなどと讀むべきものを指導し、貰つたこともありませう。當時の句

會では當百氏や柳珍堂（二十七、八の若旦那風でバナマ帽を常に被てゐた）等の中で牛耳つてゐました。喋り倒す、作り倒す、手八丁口八丁の男でありました。或は自分の持つてゐるものを短い間に出して了つたかの感があります。その點私等の様に小出しではない、二十二歳で明治四十二年五月十六日になくなりました。普通なれば牛耳るどころか句が抜けたことさへ喜ぶ時なのに彼のは全く大成と云つてよい位だつたのです。

先刻當百氏から六厘坊の句が未完成云々のお話がありました。私はさうは思はないのであります。今日六厘坊の句集を出すのは一つの歴史でありまして彼の句風はその當時の柳界をリードしてゐたのであります（從來は全く狂句と云はれてゐた位でありまして葉柳に狂句は狂句として出してゐました）。彼の異邦百句の中に

手長島一間先へ膳を据え
と云ふのがあります。その當時は滑稽、皮肉、穿ち等が重んぜられてゐました。彼の句は實に滑稽さに於てもすぐれてゐる

て思はず笑はされたものでした。

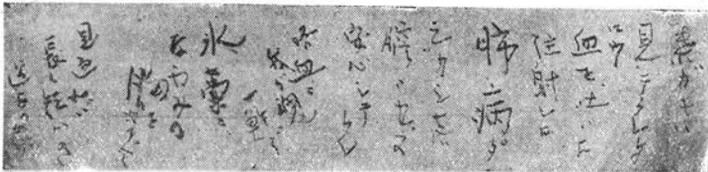
最近句集を京都から出さうと云ふので松窓君から相談がありました。この事に就いては皆よく相談をして出すつもりでありませうが此の句集もきつと歴史的に興味あるものと思ひます。會て日車君がこの句集を出さうと云つたことがあります。私が東京へ行つて戻つてから大正元年頃着手し東京の荷、君あたりからまで柳誌を借りて拔書やり礎稿は出来上つたのであります。それを上梓してゐたら既にその時出来たわけでありませう、慾が生まれて、出来るだけ完成させたいと云ふので、六厘坊の句、及び思い出を載せるのを主眼とし、それに私等の句をも併せて載せる目的で「土團子」と云ふ雑誌を出しました。之は丁度トルストイを研究するための雑誌の様に六厘坊を研究し又彼に對する材料蒐集に便するためでした。彼の名が當時意外な方面に知られてゐましたからです。此の雑誌は不幸四巻了り、肝心の所で棒折れと云ふ始末で集句も中途まで發表、他は手元に残つて了りました、この残りを入れた石炭箱は私の萩の茶屋時代に雨うたしになつて了つて滅茶苦茶になり、移轉を重ねる間に失つて了つたので最早再び完全な句集を出すといふことは全く困難なことになりましたが、最近出版計劃が起つて居りますの

で愈々決定的になりましたら諸君も出来るだけ應援して下さいる様特に御願ひ致して置きます。

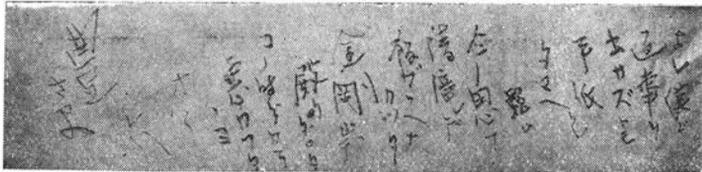
話が前に戻りますが私が最初彼を知つたのは私が西横堀の篠橋に住んだ時代がそれ以前かとも思ひますが、私は當時天涯と號して居ましたが、彼は初めて来るなり「天涯君」と云ふなりあるかゝるないか判りもしないのに家人の案内もなくもう二階へ上つて来てゐました。そんな性格の持主だったので私を何時か越後町に虎ン子と云ふ人の家へ行かうと誘つたことがありますが、その時も「居るか！」と云ふともうドシノと物干に上つて裸になつてゐました。

殆んど眼中人なき性格でありました。三十九年頃平野町の句會で「おい、看板を書いて呉れ」と云はれたことも覚えてゐます。私はよく看板を書かされたものです、人を使ふことは意のまゝでありました議論をさすと對論の餘地さへ與へられな

(六厘坊書簡)



張ガキハ
見テクレタ
ロウ
血を吐いた
注射した
肺病ダ
シカシ瘰
癧ハセヌ
安のシテクレ
略血に
死魂は
取り
氷寒に
なやみの
胸を冷すべく
目返れば
長く短かき
過去のかげ



よし候が
五海ヲ
出サズトモ
手紙クレ
タマへ頼ム
今思フ
酒邊ア
飯ガクヘナ
カツタ
金剛山ア
線リダツタ
コノ時分カラ
悪カツタ
オハリ
六

真に残念なわけでありました。彼に就いては色々面白いことが多々あります。

その一つに堀江の句會の歸りでありましたが二十四五人夜遅く歸途に就きました。或ウドン屋の店先へ來ますと彼は「おい皆一人づつ時間をおいて順々に這入れ、そして次々に注文をしる」と云ふのです。そうしてウドン屋が面くらつてテンテコ舞をするのを見て喜ぶと云ふ様な茶目振りを發揮しました。私も時々武勇傳はやりませんが彼のやうに撲られことはありません。何かまとまつた話をと思ひましたが最近多忙で家に落付く暇もない有様で、従つて材料も持參して居りません、六厘坊忌は來年もあり引續いてやることですからその機會にゆづらせて頂きます。

六厘坊は大坂柳壇の恩人でありました、我社では毎年六厘坊忌を修しては居りますが、今後も是非續けてやりたいと思ひます。今夕は當百氏から寫眞を寄贈して頂きましたが、この次には遺墨などを御覽に入りたいと思つて居ります。(二續書也)



ペンの漫弾

住田 亂 耽

人の文章を読む事は、丁度人のおしやべりを聞いてゐるのと同じで退屈だといふ意味の事を何かの本で、成程と感心しながら讀むだ。以下私が書くものも、必ずみなさんの退屈の素以外の何物でもないだらう。

私は元來至つて口下手で、特に大勢の人達の前で、ものを言ふ時には、舌の廻轉速度が急に正鵠さを失ひ、私の脳の傳令と發聲とが全くちぐはぐになるといふ出来損ないのトキーの様な人間なのである。度胸が無いのかなあとと思ふ。人に話す時には、原稿紙へ書いては消し書いては消しといふ風にはゆかない。一度口から出た言葉は、文字をゴム消しで抹殺したり、朱筆であつさり削つたりといふ工合には取消されない。私の話が之はまづい事を言つたと思つたら直ちに取消しが出来て、聴く人の印象に不愉快な感じを少しも與へず、いともスムーズ

に話が續けてゆける、ゴム消しのやうなものが發明されたら、私も「空氣の中に立ちて叫ぶ」てな題で川柳漫談の一席位は辯じる丈の度胸を持つであらう。

天來のスピーチ不能症である私は、その鬱鬱を、ペンに托して原稿紙へ吹つ飛ばすのである。勿論思ふ事を、完全に言ひ表はし得る私のペンではないが、スピーチの形式をとるよりはいくらか氣が樂で不思議にも發度胸さへ出て來る。俗にいふ吃の鼻歌——ぢやない私の場合には吃の漫文なのである。では朗らかに鼻歌の馬車に乗つて——。

○ 昨年であつたか、姫路の白鷺城を見物した時、「はらさき丸」といふものを見た一寸海賊船の名のやうに聞えるが、山の城に船が上つて來さうな筈なく、之を船だとすると、それこそ——「船へ山へ上る」といふ厄介な事になつて、文字

通りなんせんすものだが、之は武士道華かなりし頃の切腹場所で、古老の話によると、その人達の若い頃には鮮血の痕が後の壁にすく黒く残つてゐたといふ氣味のよくない建物である。この「腹丸」の建札に叮嚀にも英譯がしてあつた事を私は今でも心おかしくまぎ／＼と眼底に漂はす。曰く

HARAKIRI BUILDING

と、あのハラキリビルディングの建札はまだ麗々しく掲げてあるだらうか。何んとなしに私は氣になる。

○ 先日ある警察署の樓上へ、交通安全週間の講話を聞きに行つた。署僚の警部補が新交通規則の解説をするに當つて「最近自動車の交通はいよ／＼量的發展を示し、正にスピード時代を現出いたしました。やて云々」とまくらに名文句を吐いた。やがてこの話が終ると合圖により階下から金ピカの署長が上つて一場の訓話を試みた。彼氏は重々しく身を壇上に運び口を切つたその冒頭に「輓近自動車の交通はいよ／＼量的發展を示し、正にスピード時代を現出いたしました。やて云々」と署僚と同じ名句を吐いたものである。私はお師匠が一緒だと思つて思はず微笑をくすりと洩した。

然しその後の話は、やはり署長の名に叛かず莊重な口調で、傾聴に價ひするものであつた。

冗談ぢやなく、世は正にスピード時代で大厦高樓の間を自動車といふ遊魚の群が夥しく溢ふれ、て街といふ海を泳ぎまはり、時に街のサブマリンとなつて人を殺傷し、まぐねのなるに、操縦者をのせたま、たばこ屋を脅かしたり或ひはうどん屋、カフェーへ頭を突込入りたりして、三面紙上を賑はす物騒千萬な時代ではある。

自動車を街の魚類とするなら、ビルディングは大きな街の岩石とでもいほうか

いや、又こんな言ひ方も許されるであらう。ビルは近代のエコノミカル・キャツスルである。ビルを近代商戦の厳しき城砦と呼ぶ事を許されるならば、さしづめ給仕君は小姓位の役割を務める。こゝで私に給仕をモダン小姓と呼ぶ事をも許し給へ。

「おい給仕君！」と上席からお聲があれは、紅顔の少年たちどころに栗鼠の如き敏捷さで、「はい」といふ慣用語と共に、その聲の主の前に、何事出態といつた表情で畏まる。かくして春秋に富む彼は青雲の志を抱き、社の爲に忠勤をぬきんじあはよくば重役——と逆行かなくとも、夜學にでも通つて相當な人物にならうといふ殊勝な人間は幾人あるか知らぬが、まあこゝういつたものである。

私が知つてゐるS社の給仕に一寸風變りなK君がある。大菩薩峠の辨信に似た風貌で頭の大きな所など、石井鶴三畫く所の辨信をつくりで、口の達者な所も共通點を持つてゐる。彼が辯舌の雄なる事の一例をあげる。實はそれ程でもないのだが、時々機智に富むだ事をいふので社員に評判が良い。彼が水泳にかけてはからつきし駄目な事を知つてゐる社員が、「君は辯舌においては一方の旗頭で、さながら陸の王者の感ありだが、君を一度海中に移せば——」と一本参りかけたがこんな事位に辟易して引き下る弱法師ではない、之を言ひも終へさせず「有難う私は幸ひにも口が人一倍輕う御座いますから、たとへ身體は沈んでしまつても口だけは海面に浮いておりますから、決して溺れる心配は御座いませぬ。そんな心配は御無用々々々」とあつさりノツクアウトしたといふ事を聞いてゐる。こんな

この愛すべきK君と同じ社にAと呼ぶ交換嬢が、フレイグラントな青春の香氣を室一杯にふりまきながら務めてゐる。之は平凡な事實である。このA嬢が、ある若き社員とラブアップフェアの主演スターとなつてゐるといふ噂が落下傘の如くぱつと擴がつた事がある。之も極く平凡な人生の斷片のやうである。

この二人の猛烈な濡れ場を見たのが、外ならぬK君だつた。昔なら場合によつては、「はらきり丸」の人とならねばならぬ所である。文明開化の現代では、こんな野蠻な事はないが、その代り首が胴體にはつきりくついで居ても、その日から人間としての息が満足に出来ぬといふ器用な、そして文明的な鹹首制度が嚴存するから怖しなかつたから、至極無事平穩なのだが、その噂の發生が、一圖にK君の辛辣な口にあると思ひこんでゐたA嬢がトイレットの側で會つたK君に敢然抗議を申込むだ。「Kさん、誤解して變なデマ飛ばさないでね」とか何んとか、初めは抗辯的に、終ひには哀願的に、くどくどと洗練のゼスチューアー宜しくやつた所が、事面倒なりと思つたK君例の鋭い武器を、是で、はつきりと片付た例。

「ごかいも四階もありませんよ。二階で現にお樂みぢやなかつたですか」と巨弾一發で階段をさつさつと降りて行つた。萬事この式である。一班以て全貌を知つて貰へば良い。

この頭の大きな愛すべきウィットの少年がやがて認められて名實共に、その社の巨頭となれば、ユーモラスな重役が出来るのにと私は心ひそかに彼の成功を祈つてゐるのである。



突然

前田五健選

突然な夜業だつたと辯解し 九文錢
 ヨーヨーの子へ警笛のケタ、吉 祥
 突然逢へば冷たい女の横顔 香 朝
 突然も心得置し貯めておこ 喜 由
 突然の死は人間の幸福か 一 柳
 突然な叔父の訪れ心配だ 美津女
 突然に來て就職を頼まれる 紅
 突然へ娘の十八を紅くする 新市掛
 突然に目醒しが鳴る日曜日 葉 光
 突然の事も嬉しく新家庭 芳 岸
 突然を詫びて叱つて仲がよし 曉 童
 突然の鐵瓶の湯が沸きこぼれ 柳 夢
 突然に肩を打たれる戎橋 錦 石
 突然に出て自轉車をマゴつかせ 承 春
 パンクと音に皆んなの眼 出合、詩、郎
 悪友の白然來ればロクでなし 九 波
 突然に吞もう二人の端た錢 荷 平

突然に出合つたバーに向いた足 六 郎
 兒の薄き齒に嚙まれる乳房見る 禿 山
 出支度くの出來た所へ國の客 菊 路
 泣いて止めたに突然な事をする 春 光
 頬張つたところへ突然名を呼 二 邦子
 突然の様口には言つてゐる 利 生
 突然と突然飲みに行くときめ 同
 突然の話損得云ふとれす 方 眠
 だしぬけに挨拶されて名を忘れ たけを
 突然に記者榮轉を嬉ばし 詩 石
 突然だ私はヂツト考へる 啓 坊
 不意に來て貰一本喫ふて去に 春 秋
 突然に來て虫のよい事ばかり 没食子
 突然に會つて話の種がなし 紫 陽
 突然がこんな結果になりました えいた
 突然はまだ夕飯を喰へて居す 野 郎
 豫期してた事突然の顔で行き 孤 鶴

川柳家戸籍調 (續)

係、山雨樓

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
 (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業及又は勤務先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月

(310) 田澤有石

(1) 田澤有石 (2) 姓名同じありしとよむ
 (3) 明治三十年二月四日 (4) 弘前市 (5) 青森市北片岡一七七 (6) 簡易保險局地方課 (7) 泣いてゐてふつと手摺のおもしろさ (南北) 子供は風の子天の子地の子 (三太郎) (8) 自信の句は未だないです、二度目に詠むとみな腐敗してゐる感があつてさみしくなります (9) 民謡、小唄、外詩作 (10) 夫婦外男二、女一人 (11) 大家、センセイ、自負心 (12) 昭和三年頃からです。

(311) 村松夢裡

(1) 村松良治郎 (2) 夢裡 (3) 明治二十七年四月三日、(4) 長野縣上伊那郡高遠町 (5) 埴市出島町三五八 (6) 日本樂器會社大阪支店 (7) 酒とろりく、大空の心かも (路郎) 好きな句は實に數へられません特に取り分けてと申しますのも澤山ありますので路郎先生のを一句丈上げさして

童心は突然母を驚かせ
 電報が来て貧乏を慌てさせ
 突然に尋ねしも友疲れて居
 突然な早足女ぬいて行く
 突然に姿隠した妓の噂さ
 突然の騒ぎは掏摸の逃げたあと
 突然に御迷惑あらしく
 突然の話ウン／＼聞いておき

◇佳調

突然に來たのへ五十錢借られ
 負けまいとする氣突然向を替へ
 前觸れのない來訪も喜ばれ
 暗やみの中で按摩は急に吹き
 突然に歪さして惚れてゐる
 突然と思つた方が負けいくさ
 突然の詫びを行李の上で書き

村長の眼鏡が光る儲口
 しかられて眼鏡が鼻の先きに
 三十の眼鏡へ婿期遅れてゐる
 金ぶちの樂觀でない相場欄
 眼鏡まで其の人格を圍う見せ
 金縁の目を据へ居るヒステリー

眼鏡

角丸 明珠 富美三 吉左右 士三絃堂 山月 多郎 北陽子 紅 紫雲 世都象 荷平 春光 同 青兒

突然の譯は帳簿のムが知る
 縁があり突然と言ふ嫁をとり
 縁談へイキナリ觸れる義理の母
 停電へ剃刀の置場に當惑し
 突然の歸國にしとく譲り店
 突然を淋しきものとする女
 突然へヒリストの笑ひ
 突然と君の腫にぶたれたる
 才人に氣まぐれな歌氣まぐれな死
 刎ね炭が刎ねて愉快な部屋にも
 六感に解れた月夜へまざれ込み
 邂逅をそこへ拾は來たタクシー
 溜息に突然痛い足の裏
 泣いて居る女突然湯がたぎり
 突然に舞臺の雪は降り初め
 突然のうれしき用事頼まれる
 (軸)ハットさせてあとの爆笑

福田山雨樓選

青空と眼鏡の角度に迷ふ虫
 藍色の月夜を博士眼鏡で見
 氣に召さぬ事が眼鏡を越しても
 紹介所眼鏡をふいて待たされる
 湯豆腐に父の眼鏡がゆるんだり
 金縁の有閑夫人よく笑ひ

同 方眠 銀雪 鶴天 汐食子 舍行 同 柳人 勝二 明珠 明 民郎 同 吉左右 巷二 水車 同 健

戴きます(8)とても發表する自信句等御座いません(9)謡曲(但し聞丈け)(10)有六人(11)くどい人、面倒くさい事(12)昭和五年九月。

(312) 妹尾 變人

(1)妹尾彌熊(2)變人(3)明治三四年九月一日(4)大隅國末吉町(5)大正區鶴町四丁目一六四(6)市電鶴町運輸事務所、7)俺に似よ俺に似るなと子を思ひ。ふり向けば君も小さい並木路。神様に親子五人と申上げ。など澤山あります(8)はづかし乍らいまだありません(9)芝居旅行など(10)有り子供五人(11)酔ふてくだまく人(12)昭和五年十月。

(313) 大島 黃子朗

(1)大島勝利(2)黃子朗(3)明治三十七年九月十日(4)京都市中京區六角通油小路西入越後町二〇五(5)同(6)麴商(7)代表的なものに、君見だまへ渡移草が伸びてゐる(路郎)ことさらに雪は女の髪へ來る(水府三月の霞さら／＼別れかな)(松窓)(8)愧づべきことだがなし(9)空想すること(10)未だ獨身(11)鼠、思春期の少年(12)昭和四年九月。

(314) 竹内 機見女

(1)竹内季美(2)機見女又は季美(3)明治四十四年一月二日(4)高知縣安藝郡安田町(5)大阪市天王寺區勝山通三丁目四

謝まつてゐるに眼鏡の恩にさせ 同
 ガラス戸の風へ判屋の眼鏡越し 銀
 標本の蝶と静かな鼻眼鏡 同
 老眼鏡母は縫ひたい慾を持ち 明
 晴天白日落つて拭く眼鏡 同
 近眼鏡五度へ男が馬鹿に見え 勝
 したい事して来た過去の色眼鏡 同
 華かに鼈甲の眼鏡もてゝゐる 野
 今に來ること疑はぬ眼鏡拭き 同
 父上は老眼鏡の聖者めき 曉
 脂肪過多金椽眼鏡かけてゐる 同
 めがねかけてもやはりびんぼう 同
 粥吹けば眼鏡の曇る風邪の床 鴉
 隠居して老眼鏡にある安堵 同
 (五 寄)

夜の父眼鏡外して他愛なし 水
 フン彼奴かと眼鏡鼻にかけ 禿
 黙々と眼鏡這ふ兒を見守つて 青
 農民の子が近眼鏡を欲しがつて 六
 黨弊を難じて光り來る眼鏡 民
 (八)男優りの母の金ぶち紅 郎
 (評)父なきあとの母であらうことは男
 優りと云ふ句語にほのめかされてゐる
 苦勞をする母の張り切つた氣性が世間

に向つてまともに面を曝してゐるのだ
 萬事に氣を配り、身を挺して一家を支
 ゆる健氣な母の面妻れのなかに、どこ
 やらまだ若さが残されてゐるのも子と
 してつまされるやうな哀愁を覺ゆるこ
 とであらう。老練な句である。

(地)失敗の父の眼鏡は床の上 いわを
 (評)失意の父、何處となく後姿に淋し
 さの漂つてゐる父。見れば要心深く床
 の上に眼鏡を置いて蒲團に顔を埋めた
 まゝ寝てゐる元氣であつた頃の活躍が
 華やかであつただけに、今日の逆境が
 一層痛ましい。叙法は墨繪のやうに單
 彩ではあるが、さりげなき描寫の中に
 憔悴した父を彷彿せしむるうまさがあ
 る。眼鏡の置き所と云ふ一些事から、
 果しなき聯想を呼びおこさしめるのは
 非凡なる着想と、リズムの好調に因る
 のだと思ふ。

(天)ガンヂーの眼鏡は霧 阻まき 政
 (評)印度の聖者ガンヂーは曾て英本國
 に渡り、絶食運動迄敢行し、初志貫徹
 に努めた。しかし霧のロンドンであつた
 聖者を容るゝべく餘りに偏狹であつた
 無帽弊衣、半裸体、落ちかゝるやうな
 眼鏡の彼は、あまりにも痛々しい姿と
 なつて英京の土を後にしたのである。
 句想が壯大ではるかに類想を脱してゐ

Nishincho MEMO

雨 緑

「大阪名所」の句を一ケ年計畫で本社のの毎月例會の兼題路郎選で募ることに致しました。第一回の題は「道頓堀」で發表は各地欄から別離して佳作を川柳漫畫に致す豫定です、尙一般からの應募も歓迎致します。

▼本社主催六厘坊廿五回忌を營みました處、故人と關係の深かつた路郎が生、西田當百、齋藤松窓、木村半文錢、花谷かく、服部ふくべの諸氏が、わざと御出席下された事は實に嬉しい會合でありました。尙當夜當百氏の所藏の寫眞(故小島六厘坊、中村喜月と寫したものの一寄贈されたので會場へ祭り服部ふくべ氏より寄贈の菓子函を供へ近來にない故人を偲ぶにふさはしい會でありました。

▼庄方よし君が久し振りで道頓堀支部の主催で四月廿九日地藏寺へ吟行を致しました、同夫人の道案内でなか／＼の盛會でした。(記事参照下さい)

る點推賞に價する。叙法亦適切で餘韻

愁ひ

深み行く愁ひ靠れる梅雨の壁 荷平
 訴へス愁びペン先引つかゝり 同
 愁ひとは別に人出に疲れける 法泉子
 愁ひある人に港の雨が降る 同
 ガラス鉢愁はしげなる金魚の眼 銀雪
 鳥籠へ靜かに踞む病呆け 同
 愁ひあり窓には雨が降つてゐる 春秋
 愁ひある眼に晴れてゐる瓦屋根 同
 後れ毛に愁ひを見せて世帯じみ 角丸
 愁ひ顔云ひ當てられてむつと 同
 本心にかへれば人のみな淋し 方眠
 物思ひ一輪さしを見つめて居 同
 沈黙の愁ひを吸ふた壁の色 水車
 愁ひいっしつか波に佇む 同
 職工の愁黙殺されて居る 紅
 哀愁の窓へ春雨雫する 同
 相談口につて愁ふる人となり 元山
 哀愁をこめて納得してもらひ 同
 黄昏は愁ひの窓に迫つて來 曉童
 手術服無言の内に動いてる 月茶
 もの問へば愁ひ似たるまなぎよ 野郎

に富んでゐる。

阿部 閑 生 選

紅燈の巷に愁ひ漂へり 百文
 今日明日の愁ひに髻ひ伸びてき 三郎
 月は唯夜の哀愁見守つて 青波
 打開けぬ病氣があつて瘦せてせ 十靜
 電燈がつきて愁ひはこみあげる 舍行
 巻紙の春に愁ひの細き文字 吉左右
 溫度表二つの肩がよる愁ひ 巷二
 手紙など書いて妹にある愁ひ 鴉天
 愁ひをば色にも出さず出征し 笛秀
 愁ひフト氣がかりになる家の事 一久
 一人居れば春の哀愁つのである 利生
 沈黙のうちに愁ひの夜は明け 二那子
 手毬つく子等を愁ひの目で眺め 承春
 愁ひ顔して密談の中に居る 詩郎
 憧れた都で知つた此の愁ひ 銀波
 御愁傷様ねと彼女言つたきり 菊路
 虫ふんだフェルトが重い愁の眼 勝二
 うらゝかた窓へ愁ひを捨て立ち 明珠
 悲喜劇の愁ひに疲れきる夫婦 民郎
 のしかゝる愁と兩の手をひろげ 十三紗堂
 夢一つ消えて愁ひの一つ増え 正夫

▼江戸みつる、岩崎柳路、岩崎松代の三君が集つて奉天支部の創立大會を催すべく五月十一日夜計畫に徹夜をされました。そうです。盛大ならん事を祈ります。

▼揚井二雨君は四月二十八日東京から日光へ夫人同伴で見物されました。日光から一國寶の一つ一つに掌を合せ」の句を寄せられる。

▼平井蒼太(近江)、石曾根民郎(松本市)兩社友が五月二日來阪されて雨の夜私の動先へ訪ねられました。が、汽車の時間の都合で親しく話されなかつたのは實に残念でした。

▼本社客員安川久流美君畫讀頒布會を加能川柳會外有志によつて金澤三越六階ホールで展覽會を五月十九日より三日間催されました。

▼西村明珠君は四月廿七日勤め先の社から高野山詣りをされました。「飲むものは高野に來ても飲めといひ」の句を寄せられる。

▼須崎豆秋君は四月十日吉野から櫻と雨の便りを寄せられる。

▼富士野鞍馬君は五月十四日伊豆土肥温泉からの便りに舟原温泉沼津、田子の浦へ廻遊されし旨を知らせて來ました。「ハンカチを振るるは野暮な土肥の濱、鞍馬の句」。

▼藤本福造句集出版記念句會を五月五日

長火鉢良人の留守に愁見せ 九文錢
愁ひある軒に朝日の真正面 新市街
米櫃の底から愁ひ湧いてくる 喜由

選後感にかへて

閑生

ハサミに顔をうつす愁ふる夜 舎行
佳句になるべくして成り損れた句である、上
半を讀み下すうちにはつと氣を引かれるが
下の句でばやけて了ふ憾みがある、取扱ひ方
が正直でこれによいとと思ふが、どうも短期
の効果は外れてゐるやうだ

欽に顔をうつして愁ひあり
としては何うか、幾分か句がすつきりしてく
る

虫ふんだフェルトが重愁の眼 勝 二

さすがに佳い句材を擲んでゐる、フェルト
の歩みと愁の眼が、讀者の前で混線するのは
何故か今少し力を抜いて 十四字でも我慢す
るなら

毛虫を踏んだフェルトの愁ひ

だけでもよいと思ふ、原句の下五にカチンと
當嵌まる文字が見出せば一等よい句にな
ると思はれる

愁ひを雲へちつと考へる 北陽子

この場合愁ひの主人公は自己であつて、その
對照が雲であるから、雲を活かすことにより

て自己を現はすのが、本統の行き方ではない
だらうか

愁雲の我をはなれぬ動、やう

こゝ變へても愁ひは勿論自己にあつて、雲に
ある譯ではない

みんなから離れてる子の愁ひ顔 巨鯨

見るべき所を見てゐて、それで何處か物足り
ない個所がある、題作であるために作り難い
點もあらうか

みんなから離れ愁ひと遊んでる

憂愁を包んだ窓知らず咲き たけを
色彩が現はれてゐないので興味があう、今
少し浮き出した描法を採つては如何

憂愁の窓とは知らず派手に咲き

愁ひ顔話しかけても返事せず 美津女

如何にもその通りではあるが、その通り以上
に出てゐない、成るべく句意を損はぬ範圍で
愁ひ顔右ひだりからのぞき込み
とすれば、少しく句が働いて來はせぬだらう
か

愁ひをば地圖に求めて満洲へ 一杯

この句では求めて一撞着がある、句の豫期
するのは愁ひの逃避を地圖に求めての意味
であるから、愁ひをばか、求めてか何れかを
他の語に換へればならぬ、「封じて」溶かし

て「吸はれて」なども妥當ではなきやうだ。

夜京都仲源寺で開催されました。同句集
は希望の方は送料共金二十四錢京都市北
白川伊織町川柳叢書刊行會宛に御申込み
下さい。同刊行會から引續き第三篇木村
半文錢句集を刊行されます。

▼清水虚白君から五月十三日伊勢参拜さ
れました。「大社只ありがたくありがた
く」虚白の句。

▼河合紫石君が松山支部幹事となられて
第一回の大會を五月十三日伊豫新聞社樓
上で開催されました。今治市から出席者
もあつてなか／＼盛會だつたさうです。

▼日野鹿之介君は五月十四日華燭の典を
舉げました。お喜び申し上げます。

▼松江支部と八束支部の合同で松江市外
大庭村大宮で四月廿二日觀櫻句會を催さ
れました。

▼阿部閑生君は耳炎で阪大病院へ入院
されてゐましたが経過良好なので五月十
五日退院されました。

▼鶴峰、山月、芦穂、輝翠、朴甫、松泉

の諸君と私が五月十三日大阪市電氣局慰
案會で琵琶湖馬巡りに參加した機會に船
上で作句や寄せ書の興にふけりました。

▼須山重陽子君左記の處へ轉居されまし
た。神戸市須磨區松野町鐵道官舎二號

▲本號編輯は町二、琴人、山雨樓、鶴峰
豆秋、變人と私とで致しました。

十疊半に

安川久流美

路郎様へ

○雀四五羽来る私の住居
○雪の下の葉裏うす桃いろの雨
○どぶ川に斯くも醜い個人主義

けふ大掃除の検査日に、柿若葉へそぐ
月雨、埃の立つよりも、心が落ちつ
いて、静かな日です。左足膝關節に腫物
ができて四五日を悩まされた上尙少うし
不自由な足ではあるが、もう幾日錢湯へ
行かないのを憂うつに感じ縋帯の片足を
尻餅ついた滑稽な調子に上げて薬湯に二
度ばかり浸つた姿はわれながら吹き出し
たのです。私の行く錢湯は名も北國湯と
いつて毎日十七日には月並連の俳句の集
りがあるのです、そんな關係からでせう
が男湯のみ脱衣場に、十數枚の短冊が額
として揚げられてある。

憂きふしを、吃いず金魚賣の聲

といふ一句をものして俳號清峯といふ主
に渡しました。外は雨です、何と和やか
な気分にする小都會の錢湯を想像して下
さい。

原稿紙平二こそけ書かれたりの次男平

二は二ヶ月の誕生も過ぎて大分のびて來
ましたが、未だよろこびとも歩む容子も
ありません、茄子や胡瓜の末なりといふ
感じのする神経質の子供です、申歳生れ
だけに手だけ器用に動かしてゐます、今
の私の生活には最も足手纏ひの一人です
が、日に日に親の顔をおぼえて愛くるし
くなるのとさて他へ引渡す氣持にもなれま
せん。

◇ 貧しさの中へおもちやの獅子頭

子の個性手易く知ればこゝろ順
斯うした子供惱めいた句で貸箋紙をよ
こしてゐるのも雨の日のすさびです、暢
氣さうに見えて、少しものんきで居られ
ない私は川柳人なるが爲めの徳倅かも知
れません。(五月十七日)

街に住めば

高橋かほる

去年八月芝居を演た折四人の顔をして
貰つた「森神瀧松氏」といふあかぬけの
した嬉しひおつさんに十合で會へば「又
芝居しなはつたらどうだ……………」

私「サイナ……………」

其の節里十九親分方でこれもやつぱり

芝居の折に笛を吹いてくれはつた望月の
某氏に會ふと

「今度いつ芝居しなはんねん、又しなは
れや……………」

「へエおうきに」
緑雨氏からカフエーから呼び出しの電
話が掛かつたり……………春は惱まし

僕

山本三巴

◇ 僕ちよつと云はねばならぬ事がある
天長節と土曜が重なつたお蔭で——月給
を時間で割れば腹が立ち——の安月給取
りも二日續きの休みに久しく味はへぬゆ
つたりした氣で——うらゝかき頻りにぜ
にが欲しくなり——欲しくなつても徒勞
は明らか、喰てチヨンの現在を樂寢にた
のしんで階下のラヂオを子守唄と觀念の
眼をつむる。馴れぬことは晝寢も六ケし
い。腹這ひで讀む本誌五月號、吉田水車
氏のトビックスを二度讀みかへしてこら
いかにと坐つて自製の麻雀臺を引つ張り
出してペンとつた。その稿のおしまひは
川柳と認められないことにちよつとした
不満を持つてゐられるやうだ。云はねば
ならぬ事があるといふのは是だ。水車氏
は——四月の例會にお目にかゝつてゐた

のだがお顔は思ひ出せない——藝術といふ二字をどの位結構なものと思つてられるかも知らぬが、總ての道の不振は斯うしたケチ臭いものを欲しがる下素根生が禍してゐるのではあるまいか。今日君僕お互が活きていく上に潤ひを與へて呉れるもの全體、天の岩戸の太神樂から一回一錢の紙芝居まで……藝術といふ言葉は一體いつ頃出來たのかと云ふ事を一度考へては呉れないかと僕君に頼みたいのだ。最近思ひ出させた九代目堀越、藝術をアテに目を割いたか、觀世世阿彌藝術のため多くを殘したか。例は全誌を埋めつくしても果てしはない、藝術が欲しけりや譯はない「藝術川柳」と登録すれば君の惱みは解消する。

◇も一つは柳樽が多くは無記名である點に權威に缺けた觀がする如く仰せられるが、是も僕と正對反だ、心憎い句、一體どんな奴がこんなに旨い句を……と思ふ事は有り過ぎる位、併し權威に缺けるなんてこたあ今まで一べんも思ふことがない。寧ろこれが川柳の大きい所だと鑑を深めてるんだ。この世智辛い時節に手間閑つぶして川柳でもやらうと云ふ人間がしみつたれた情ないこと活字にして呉れるなど眞剣にお辭儀する、俳壇一方の雄河東碧梧桐さんは——詩として藝術としての現俳壇を認めず……化政以後、天

保時代の偽悪さに墮落してゐなかつたら明治の子規も生れなかつたかも知れない……今後に更生する新たな俳句は、遺憾ながら、現俳壇人の手にはないのだ。と云ふてゐられる。

◇眞に川柳を愛しての醍醐味によつて己の生活にいろいろを惡まれやうとする者、決して善い句を作ること以外に力を裂くなど云ふ事を聲を大にして叫びたいもう今日に至つては新しい人を川柳に誘惑することも、社會は出來事の、いろいろに川柳を無理に結びつけてお役所字でよくやるいろいろの運動のやうな事も僕はそんなに力瘤を入れる必要はないと思つてゐる、すべてものごとの迷ひ本始に還ることによつてもつれの糸がほぐれるやうだ。市井文藝として吾々の古き先輩が川柳を如何に楽しんで來たか、後生を願ふ年寄が家を若夫婦に頼んで提灯片手に講のある家へ歩を急がせた氣持ちとあまりへだつたりのない心で同行達を膝を並べて作つたのではあるまひか、中の島的美觀が外國の繪葉書に似て來た今、貧乏しながらアメリカの眞似ばかりして來た日本に、藝術と權威のレツテルを欲しがら、その希望は永世叶えられないことなきを洞察して敢て老婆親切、憎まれて見たくなつたまで、序に一言、川柳人はも

つと世の中の眞髓を今少し正鵠に、そして無駄な努力をせぬやうにせなエライ損だと思ふがなす。(天長節の夕)

米村あん馬氏の

プロフィール

尼 縁之助

松陽新報社と言へば地方新聞の權威だが、その營業部に其の人ありと知られたあん馬米村氏は實に其社の實際的に背負ふて立つ第一人者である。

山陰の川柳は相當な發展をしてゐると自負してゐるが、その發祥地は何んと言つても、あん馬氏擔當「松陽新柳壇」である。山陰の柳人達の太半はこの柳壇からスタートを切つてゐる。よしんばそれが松陽柳壇の外にスタートを持つてゐたとしても、松陽柳壇から得た間接的な影響の大なることは否定されぬであらう。この松陽柳壇の生立は遠く村穗珍馬氏に遡るものとは言ひながら、よくこの志を繼いで今日の大成をかち得たのはあん馬氏の絶大な功績であり、地方柳壇の大恩人として、衷心より敬服せざるを得ぬ。

松江の瀬愛川柳社が第五回山陰川柳大會を機として、あん馬氏の川柳生活廿五年謝恩句會を開催したことは地方柳壇として、又脚下のグループとして餘りに當然であつた。

あん馬氏の句に就いては本誌に出た事がない(?)から大方の讀者諸氏は餘り御存じなからうと思ふので、最後に此の近作を紹介したいと思つてゐる。勿論これらの句は松陽柳壇に一日一吟として發表せられたもので、機械的な多量生産ではない。實に一步々々人生の軌道に載せて、健實な歩みの姿である。この人格高潔な勤勉努力の氏は、本社縁雨氏とよく相通づる句主である。

氏の川柳生活廿五年は實に輝かしい足跡となつてゐる。將來益々勉強を誓はれた氏である。この人の一步々々は、私達後輩へ幾多の教訓を宿してひゞく、若き日の情熱は無くとも、老練の技巧は無くとも、氏の人格的情熱は更に燃焼しつづけるであらう。

私は今氏の作家的存在を論じやうとするものではない。浮ぶまゝのペンの走りである。こんな筆法で氏を論ずるとすれば、餘り禮を失するであらう。昨今の忙

殺の中からうつるまゝなるプロフィールにすぎない、句は又選んだのではなく、漫然と拾ひ集めた近作であることを附言してペンを擱く。

米村あん馬氏句抄

川柳生活二十五年の新春を迎えて(白題)

輪飾に廿五年の古硯

暮近き日脚の伸びる空へ城

北斗星下界は梅に寝静まり

煉炭の燃へながらも持つ丸み

春の來た日射に柳縫れ初め

風邪漸くほんとの飯の味になり

日永さみ翳せば空も丸う見え

飲みに来い來いと、ソフレ羨ま

同じ陽の下へ椿は紅と白

子に眞似てヨロヨロ腰ッ付き

春の夜はいゝものにして誘ふ來

雨垂れを氣分にして猪口はずみ

立話街の柳に風が見え

夜蕎麥賣り御夫婦様へ荷を卸し

花の咲く化度に看板屋の衣業

鼻紙手ざわりになる袖だゝみ

盃を勧めて断然勵まされ

三月の夜短かを知る脇枕

白魚網昇る旭に温まり

波の綾顔に邪寛なり白魚網

花篝宵の明星よく光り
春の宵錢湯に行く連が出來
大醉ひの僧に會ひけり花の山
遊んで、夕櫻とはなりにけり
花の雨下女つんとして米をとき

高野詣と弘法

大師

西田 艸 樂

高野の奥の院の御堂の直ぐ前を流れる小川に玉川の橋と云ふがある。その橋から下を見ると清らかな淺瀬が流れて、無數の小雜魚が浮游してゐる。この雜魚は鱚(はえ)に似た大は四五寸、小は一寸位、棲息してゐて、手で掬へそうに人に狎れてゐる。その大なるも小なるも、青い背中の脊鳍の所に褐色の斑點を描いてゐる、恰度その斑點が橋の上から見ると怪我でもしたかの様に見える。

一群の參詣者を橋の上まで導いて來た案内人は、此の魚を指してかう説明する一皆さま、此の橋の下に泳いでゐる魚は弘法大師が御遍路の砌、百姓が魚を捕つて焼いてゐるを御覽になり、殺生戒を説

いて百姓から貰ひ受けて水に放つてやりますと、焼かれた肴が泳ぎ出しました、それで今尙脊中に焼かれた痕が残つてゐます」

この魚は高野山に限らず、僕の生國丹波あたりにも澤山にゐる。此の牟豆魚の斑點が、高野山では場所柄らしい傳説が生れてゐる事が面白いと思つた。

これと同じ様な話は丹波邊にも一つある。それは、祇園鮎と云ふ一種の鮎で両面が暗黒色で少々グロ味のある魚である。これは弘法様が御巡錫の折、これも同様百姓が焼いてゐる鮎を今日は祇園様の日だから殺生をするなと云つて放つてやつたのだと云ふ。

法力は、焼いた肴が泳ぎ出しと早速駄句つて見た、焼いた肴が泳ぎ出すばかりでなく、その子孫がみんな同様焼痕を持つて生れる、此の様な傳説が丹波に今一つある、これは法力とは違ふがかうである。

丹波は栗の産地である事を皆様御案内の通りであるが、そのうち私の生れた在所から三十丁程の村に岩屋と云ふ所、こゝが丹波栗の本場として、甲洲産の栗も

信州産の栗も此の村へ引取られて丹波栗として出される位である。此の岩屋だけに産する「てうち栗」と云ふ實に見事な、小さい婦人の握りこぶし位もある大

きであるが、その栗の底部に爪痕がついてゐて、これが、昔足利尊氏が戦ひに負けて岩屋の石岩寺(眞言宗)に隠れてゐた。空腹の爲めに栗を拾つて食べやうと

する時、官軍が攻めて来たから、皮に爪を立てたまゝ捨て、逃げた、その栗が生えて今に「てうち栗」となつて種族が残つたと云ふのである。

石芋と云ふ食ふ事の出来ぬ芋がある。弘法さまが巡錫の砌、上野國は世良田村にさしかゝられた時、百姓が美味そうな芋を洗つてゐたので、愚僧に一つ呉れぬ

かと乞はれた處、そんな偉い坊様とも知らず、百姓は此の芋は硬いからと云つて惜しんだ。すると弘法大師早速よし拙僧に食はさぬ様なれば、お前達に食はせぬと、オンナボキヤ、ペーロシヤナマダラとやり出した。それから此の村では、芋を植えると見んな石になると云ふのである。私も先年土佐の室戸崎に遊んで弘

法大師の食はずの芋と云ふのを説明された。里芋に似た芋である。薬種に使ふ我

茶(がじつ)の事である。

一體弘法大師の傳説と作品の多いのに驚くばかりである。私はこれで空海上人の生産地讃岐の善通寺と終えんの地高野山とへお詣りをして、その他所々方々で

隨分弘法大師御作の佛像と云ふものを拜觀したが、まだ私の見たものは日本國中にある百分の一にも足らぬであらう。大いした精力絶倫の坊様もあつたもので全國に一萬以上作品が残つてゐると云ふ事である。だから

佛師屋をしても空海食ひかねずとある。何でも偉い事は弘法大師の作にする。發明はみんなエヂソンにする様なもの、いろは假名文字も弘法作だとの事佛作の世に行届くいろはなり

とある。應天門の偏額を頼まれて達筆を揮つた處、弘法も筆のあやまち、點を一つ打ちそこなつた。そこで負け惜みの坊様、額に向つて門の下からエーヤツと氣合ひ諸共、筆をなげつけた所、筆は忘れた所に點を打つて再び坊様の手に逆戻りしたと云ふなかゝあざやかに奇術もやる、そこで

弘法の點を打たれて點を打ちと云ふ句がある所以。南無大師遍照金剛

肱・枕・艸・紙

(六)

梅本塵山

【五十七】

江戸の末期には、猥褻なる種々の物品が公然賣買されたり。花見時に賣出す、紙製の百眼といふものの鼻に、○莖を附けたる有り、王子土産と稱して厚紙を切抜きて、裸婦の子を抱いて、入浴する形を作り、下より刺したる細竹を上下すると裸婦の片足を舉げて、○部を顯はすものを賣り、龜戶土産の張子の人形には、お龜が裸體にて、大○莖を背負ふものを賣り、飴細工と新粉細工には、猥褻至極の形をなしたるものを、看板として出し、金花糖と稱する菓子には、○莖の形したるもの有り、がらく煎餅といふ菓子には、其中に○畫を入れたるもの有りしが、是等の物は、明治五年十一月、總て法令を以て禁止されたり。

【五十八】

近世女形の名人と稱せられて、明治十一年七月に死去せる、俳優三世澤村田之

助は晩年に脱疽といふ病に罹り、兩脚を切斷せる後も、なほ舞臺に立ちしが、彼れが「鏡山」の狂言の、尾上に扮せるを予の見たる時には、舞臺に居りたる儘にて、少しも立つ事を得ず、兩手の指も病

毒に犯されて、白紙を巻き居たる事を記憶す。此田之助を美貌なりしと、世に噂する人あれども、決して好男子には非ず。技藝は優秀なりしも、其容貌は八世岩井半四郎に及ばざりし。東叡山の某寺院の住職某が、田之助の容色に溺惑し、多分の金子を浪費して、遂に寺を逐はれし事實は、二三の小説に書かれしが、慶應の頃、予の父が知人の口入にて、東叡山内の東漸院の住職某に、金貳百圓を貸與したるが、其れより間も無く、某が田之助に溺惑して、金子に差支へし爲に、種々非行をなせし事が發覺なし、寺を放逐されし故、父は貸金を損失したりと、屢々語るを聽きしが、小説には東漸院に非ず

して、他の寺院の住職と書かれ居るが如し。此東漸院の住職は、非人頭の彈左衛門にも、多額の負債ありしと、當時、世間にて噂したりと云ふ。

【五十九】

予は五歳の時より、父の膝下にて、習字と讀書とを始めたが、八歳の時（明治二年）寺子屋に入學なし、十一歳の時（明治五年）淺草田島町の誓願寺内にありし、東京府立習成舎といふ、學校に入學したり。此學校は現今の中學程度のものにて、英漢數の三學科と習字科とあり。未だ學校制度の整備せざる時代なれば、生徒は四學科を修むるも、一學科を修むるも隨意にて、一定の教科書も無く、授業時間の割當も無く、日々四學科の教授を、同時に始めて同時に終る故、生徒等は、教壇に充てられたる、寺院の本堂と庫裏を、彼方に往き此方に來り、一人づつ、教員の教授を受けたり。試験は年一回有

りて、此れも首席教員の面前に、生徒が一人づゝ出て、試験を受ける例なりし。明治初年の學校の情況は、斯の如きものなりし也。

【六十一】

明治五六年の頃、上野公園の摺鉢山下に、多くの吹矢店が出て居たり。此れは地上に藁を敷き、後の方に紅白の幕を引き廻し、其前に二尺許の竹筒を立て、その上に雞卵を載せ置き、客に吹矢を以て雞卵を吹當てさせて、矢が雞卵に立つ時は、それを客に與ふる也。これは一錢を出すと、矢を三本渡したり。予も學校よりの歸りに、同級の某華族の令息と共に、此吹矢店に行き、雞卵を吹きたれど小兒の息弱くして、雞卵に矢は立たざりし。其後、張子の達磨を竹筒の上に置きそれを碁石にて打落させて、景品を與ふ店が出来たり。室内射的といふものゝ出来たるは、此れよりも後の事なり。

【六十二】

餅の札といふのは、既に元祿の頃より有りしか

弱法師わが門ゆるせ餅の札

といふ、其角の句あり。此れは毎年々末に、非人頭の松右衛門が、町々の表通りの方々に來て、切餅を貰ふ例なれば、其れを彼れに與ふると、貰ひたる曰とし横一寸縦二寸餘の紙牌を、出入の門柱の下部に貼り行きたるもの也。其紙牌には何か文字を書き有りしが、今それを記憶せず。此習慣は、明治維新の頃より廢りたり。

【六十三】

文化の頃の錢湯の二階の情景は、三馬の「浮世風呂」に據りて、其大概を窺知するゝが、江戸の末期より明治の初年に到る、錢湯の二階とは、多少相違あるものゝ如し。予は父に伴はれて、只一回行きたる而已なれば、詳細の事は知らねど、先づ客が二階に上ると、茶番の女が粉茶を煎じて出す、それを飲みて、其處に衣服を脱ぎ、下の風呂に入りて再び二階に上ると、亦茶を汲みて出したり。二階には市中に賣る駄菓子、二倍大のものを箱に入れて賣り居たるが、明治の初年に一個の代金五厘なりし。茶番女は、二十歳前後の者多く、亦年闌けたる人妻が、

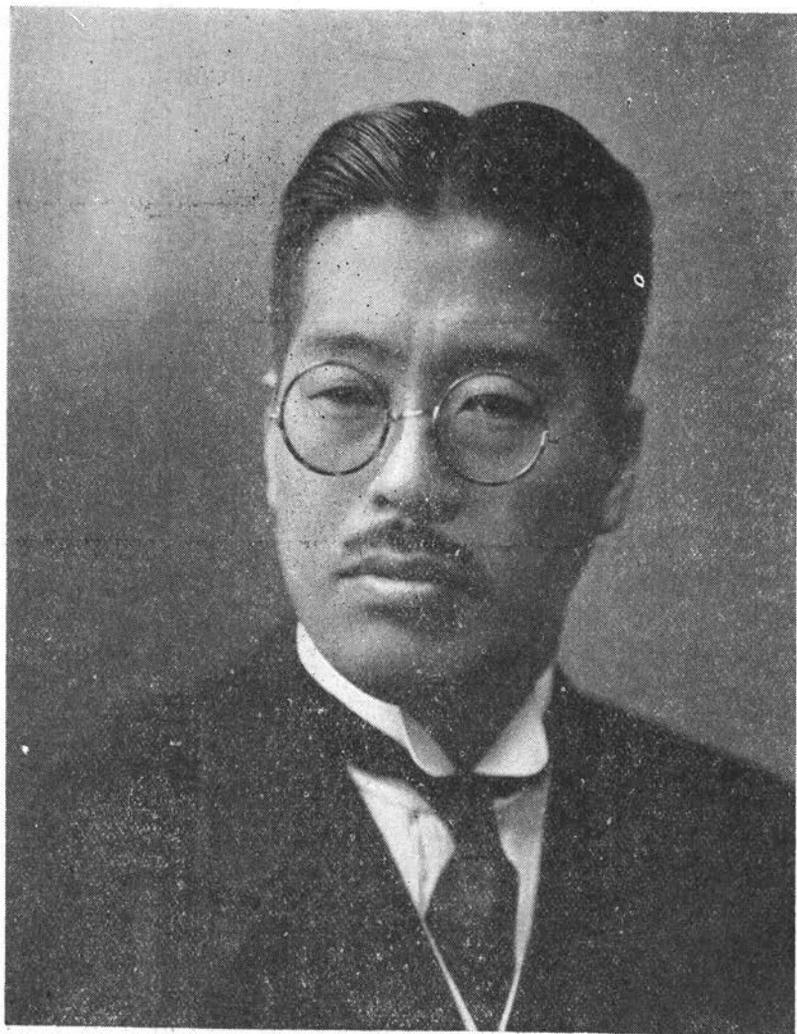
【六十四】

内職にする者も有りしと聽く。孰れも日々自宅より通ふ也。此茶番女は、明治になりて後、其風儀が悪くなりしといふ噂有りし。錢湯の二階には、必ず大窓ありて、其處より女の浴場が、よく瞰下されたりと云ふ。予の居たる町の錢湯には、二階の無かりし故、女の浴場の脇にある座敷にて、女が茶を賣りたるが、其座敷に居ると、女の浴場が一目に看渡されたり

くべむしせ歌謡を美市都

員助賛社本るたし補候立りよ區東市阪大

したれら送へ上壇政市を**君助之卯本藤** 會友政 薦推



志 有 社 誌 雜 柳 川

郎 路 生 麻 者 表 代

再度南區よ馬せ本同人

無黨
公認
庄健一君を支え
たれさせ



川柳雜誌社有志

代表者 麻生路郎

地藏寺吟行

北川あや美

四月二十九日道頓堀支部の主催で南海



向フ子右ヨリ (左列) 飛山、鶴峰、南面子、豆萩、越雨、ひろし、勝太、萬よし、夫人、銀波、戀人、かほる (前列) 吉原、銀端、萬よし、交無、雲平、露那、和尙、舟々 (撮影あや美)

電車高野線杜鵑の名所地藏寺へ吟行する
千早口で下車して一行二十餘人が春の
小道を狂ひそうな足取りで登る。

地藏寺の境内の鐘撞堂の傍、谷へつき
出して建てられた杜鵑亭で、圓座になつ
て盃を手にし乍ら句作旁山の暖かさ、
うまい白鶴の味とに酔つて来た。

かほるさんが緑雨氏よりコップに酒を
ついでもらつて嬉しい管を巻いて居る。
「おほきに、よろくればはりました、又お
くんはなれ」

かほるさんは踊りだした 次々と藝が
飛び出してとても愉快な宴會になつて來
た。晝から寺の離れ座敷へ席を替えて漫
談會だ、寄せ書だ。

寺の表で三四人が、わい／＼騒いで居
る、兎を生け捕りにしたのだ。幹事萬よ
し老矢鱈によろこぶ、お寺で樽をもらひ
兎を入れて、此處を引き上げ三日市に向
ふ。道傍に農夫の「じんべ」と鎌とが落
ちて居る。路郎師と葉平氏がこれを着て
百姓の「おつさん」と「いさん」姿に
なつた所へ、萬よし氏が兎の樽を提げて
三人が並ぶ。

師は先頭に立つて朗らかに歌を歌つて
行かれる。他の一同もいゝ景色、げんげ

咲く野邊を心行くまで眺めつゝ三三、五
五、に歩いて居るので一行の列は延々二
町にも及ぶ。

道ばたの、げんげ畠で第二の宴を開い
た。碧天の下に夕陽をあびて、かほるさ
んや禿山氏が舞ふ、歌ふ、舟々氏がおど
る、コーラスをやる。

心行くまゝに春の野邊に遊んだ一行は
歸路電車の一輛を占領して第三次會を開
いた。電車までが面白くうかれて走つて
居る様に思つた。

難波に歸つて道頓堀支部並びに方よし
氏の萬歳を三唱して成功裡に解散する。

題 地藏寺、選舉、鐘

地藏寺 同志の聲は、みな丸し 山雨樓
言論に文書に明日と云ふ 選舉 舟々
大阪をのがれて鐘つき堂の下 あや美
當選の酒にお前と俺が酔ひ 銀波
さしが鳴き鶯もなく地藏寺 鶴峰
咲き揃ふ櫻映りて響く鐘 南面子
釣鐘の音なく地藏寺暇する 禿山
餓鬼の聲釣鐘堂の静かなる 同
一票の力に太い手を合せ 變人
當選御禮男の太い手に出来る 同
踊れ／＼もう千票で一ヶ月 萬よし
諸行無常釣鐘の下で酔ふてゐる 同



・耶路・百當・窓松・錢文半・くこか・樓雨山——(列前)列一第(りよ右てつ向)明説眞寫
 ・美やわ・平葉・山禿・稔・路丹——列二第 九十里・紅・南二・水新・人學・巴三・雨綠
 ・月素——列三第 保正・子流交・むさお・るほか・秋豆・幽雅・鐘夕・車水・源桃・人變
 ——列四第 羊一・童泊・耶鶴・わわい・波銀・步遊・美鮎・光夏・光春・光秋・磨五四・夢翠
 (影攝館スタンワ) 裡夢・甫朴・丸角・子柳小・春晚・鐘夕・耽亂・峰鶴・木子・次柳・童曉

各地柳壇

本社六厘坊忌

五月五日夜

於道頓堀俱樂部

本社の恒例によつて、明治柳壇の偉才小島六厘坊の廿五回忌を營むみま
 した當夜は故人に關係深き、西田當百、齋藤松窓、木村半文錢、服部ふく
 べ、花谷かこくの諸氏が特に出席せられ、尙當百、半文錢氏及主幹路耶氏交
 々追憶談を語られ、故人の風骨を躍如たらしめ、近來になきしんみりとせ
 し句筵であつた。尙當百氏より寄贈の故六厘坊の寫真、ふくべ氏の寄贈の
 菓子を供へ、出席者へは全部本社特製「記念繪葉書」一組を贈呈致しまし
 た。十一時閉會。(琴人記)

出席者

路耶、緣雨、鶴耶、豆秋、變人、ふくべ、當百、夏光、かこく、秋光、二
 南、鶴峰、山雨樓、三巴、鴨野、稔、一羊、はるを、夢裡、雅幽、紅、朴
 甫、おさむ、晩春、鮎美、遊步、千春、茂、小柳子、交流子、正保、いわ
 を、かほる、泊童、新水、素月、桃源、水車、半文錢、亂耽、里十九、銀波
 柳次、春光、琴人、葉平、禿山、沐天、角丸、四五磨、曉星、子木、雨少、
 當藥、丹路、あや美、松窓、翠夢、夕鐘。

近眼のマグム口だけ達者なり

(人)ホストを撫で、近眼酔居る

(地)號外(近眼)顔邪寃になり

(天)誰にもなく近眼は挨拶し

紙芝居看板替えに聲からし

高架線窓へ看板がかり見え

晝見ると看板の骨良く目立ち

看板屋晝伯氣取りで裸婦を書き

看板屋小せまい街をやかましく

履歴書が金看板に迷はされ

看板は妻の名まへで儲けて居

看板の魅惑に財布空になり

看板に博士と書いて足らぬなり

看板は大きく出して足らぬ口

(人)自轉車に嘘を言はせる繪看板

(地)何所やらの看板落ちたら風

(天)看板は小路の角に疲れはて

軸看板の下へ猫の仔上げませう

川柳 天王寺句會 (大阪)

五月十三日 於鶴峰居 福田鶴峰報

兼題 曇 縁 雨 選

日曜の出足にぶらす花曇 詩 郎

切れ話見上げる空も曇るなり 變 人

曇る空一直線に菓にかへる 葉 平

曇天へ拗れて戻つた鏡糸 紅 秋

(佳)曇天を仰いで仕事見つけに出 機見女

(佳)たそがれが曇る心にしてしま 平 選

席題 身邊近況 葉 豆 秋

湯から出たまつ赤な肌のいとしげ

愛を離れ心の隙が出来た今日

去年の夏瘦見逢へる君と飲み

病む兒抱いて涙かくすも旅なれば

席題 單 物 紅 選

單物兒はのびととのびと

夏瘦がはつきり判る單物

單物乳の丸つきりにチト困り

益こいゝ夏の袂をひるがへし

(佳)單物氣輕な人にしてしまひ

(同)單物妻と歩くも久し振り

(同)單物五月某日しつけ糸とる

席題 壁 變 人 選

壁が凹んだ日めくりを掛けて置き

壁にもたれて空想も面白し

壁にうつりし影におごるく

壁めり替へて佳き日暗れたり

(佳)夜の壁聲なき聲に聞きいりし

(同)すがりたいたい心に壁があるば

席題 探し 當 禿 山 選

探し當てたら愛の菓にある

(佳)探し當てた事不思議な人の波

(同)探し當てたから笑ひ事であら

(同)探し當てた職に不平を言ふぞ

(軸)考へて見れば自分が仕ま込み

席題 表 札 白 峯 選

愛の菓は下の表札借りて住み

表札の四五枚賣れている天王寺

表札と並べて衛生評議員 頃

(佳)表札に土産の品を持ちなほし

末の兒に成つて初めて鯉幟

親子の力で鯉のぼり上りきり

働らきに出る眼にふれる鯉幟

鯉のぼり負けん氣になる風があり

春風の風飄々と鯉のぼり

はつ夏を腹一杯に鯉幟

緋鯉黒鯉空に流れて風青く

川柳 加茂川句會 (京都)

五月十日夜仲源寺にて

席題 鯉 鮎 美 選

雲うつる波紋にゆらぐ鯉一つ

鯉はれる御宮の庭の静けさよ

散る花の虚偽より鯉の動きそめ

鯉一つはれて茶室のたそがれる

(佳)どうしても鯉が邪寃する金魚

(同)熱情の瞳に鯉がはれて

(同)藤棚の二人へ緋鯉浮いてくる

軸 味噌汁の鯉を朝から真二つ

席題 働 九の 鮎 美 選

撒水に働き足が出る足袋がぬれ

土の香も真し働く感謝

働いてくれる息子の瘦せてゐる

働いた顔酔ふた顔赤電車

ハンマーが認めた俺の働き

働いて男一人のつまらなり

長男も次男も働くのうらさびし

働けば過去の秘密のうらさびし

蒼い顔と手とみんな働らいている

暮れてゆく今日一日へ腰タオル
春風にねえさん冠りが微笑めり
夕焼に疲れたタオルほつて置き
蒸したオル庭の緑がこぼれさう
真心にすまぬ廊のタオルなる
手拭に旅のスタンプ派手に押し
一年生みんな地球がほしいなり
理科室の地球儀へ午後の日が廻り
妄想へ地軸のゆらぐ音がする
地球の引力にニエートン死んで
地球から三日月様をほめちぎり
地球を風船玉は放れゆく
地球を斜につばめ飛び違ふ
地球を斜につばめ飛び違ふ
先生は地球抱いてやつて来る
地球儀を凝視めて金塊掘る氣なり
地球儀に抱けそな氣がするよ
阪の上カーブに一輪花が咲き
ランデブー坂の急なも知らぬなり
坂下の家生氣あり鯉轍り
坂道が蛇が一匹横切つた
松かさ一つころがる坂の晝
坂道を登りつめたる駄馬の汗
先生は坂で子供にひつばられ
順禮の母子に坂は夕焼ける

同 青波
同 法泉水
同 亂笑
同 一雄
同 鹿之介
同 鹿之介
同 一雄
同 天痴人
同 青波
同 法泉水
同 六郎
同 六郎

川柳 高知句會

四月二十一日夜 中澤濁水報
アラシル樓上に於ける月例會
席廻 試運轉 桂 風選
發明の歡喜エンヤン知つてゐる 狂聲

法則に觸れても見たい試運轉
緩急を心ゆくまで試運轉
軍部から期待をせらる試運轉
試運轉樓へふつと氣が變り
試運轉思はぬとこでふと止り
(五)もう一度油を差した試運轉
(五)研究の餘地がもう無い試運轉
(同)試運轉マストを繋ぐ旗が揺れ
(同)折紙は國産とある試運轉
(同)警察の許可の大きく試運轉
(人)試運轉そつと故郷へ向直り
(地)米國に勝てる自信の試運轉
(天)試運轉手を舉げた見通り
軸處女飛行郷土の空を高く廻り
席廻 作者

文展へ出すアトリエに迫る胸
(佳)三角の戀が作者に面白し
(同)傑作の影に悲惨な友のあり
(人)戀愛詩作者へ淡い戀心
(地)創作へ妻もともく瘦せて
(天)原稿は賣れず櫻々髭が伸び
(軸)底見せて感心をさす柿右衛門
席廻 水引 柳

水引にふとあやふやな試験官
抽斗にろくな水引見當らず
水引へそつと嬉しい指を繰り
(佳)水引の位置からのしの貼り所
(同)水引は缺の音にあらたまいり
(同)水引が鶴に成つて嬉し日
(人)大安の今日水引の締具合
(地)水引の色をお客にたしかめる

青雨 花舟 春夫 狂聲 朗水 紫果 青果 十歩 青果 柳風 紫白 朗水 青雨

(天)素人の手に水引の粉が落ち
(軸)正札の店に水引代を負け
兼廻 抱腹絶倒 濁 水選
可笑しさに疲れて頸へマツサーツ
居眠の禿を粗末に遊ぶ蠅
吊食は顔一杯の口になり
(佳)浴槽へ来て女湯とふと氣づき
(人)すましてる葉巻の知る前ホタン
(地)洪笑の中へ噂の主が来る
(天)お助けと悲鳴をあげる程笑ひ
(軸)言ひかけて這ひ廻るに笑ひ入

川柳雜誌社 一週年記念句會(愛媛)
西條支部 四月十六日 於武丈樓下英賀夫報
常日は正午より晴れて句會日和となつた
が孤鶴、古舟、義郎、集人、狂波、青糸、虛
空諸氏の顔の見へなかつた事は残念でした
が遠來の新居濱の方々に感謝し披露とに
大拍手と爆笑の内四時に閉會、最優勝者西英
子君へ路郎先生御寄贈の短冊「日は東西の年
らす候か・興や走馬燈のともる 迄酒合戦であ
つた終りに小生發聲にて川柳雜誌社の萬歲
三唱並に西條支部萬歲三唱をして名残おし
くも歸途についた。

席廻 裾 五選
裾の緋白い足青春の眼になやまし
撒水へ晴着の裾を氣にしたり
春風へ日傘日傘が裾をける
裾等に裾が氣になる向ひ風
共稼ぎ裾をからけて後を押し
村雨 承春 虹一 靜夫 英賀夫

裾切れを氣附いだ今日の麗らかさ

失戀の眼に惱ましい二人連れ

成らぬ戀女の度胸怖くなり

失戀をそれとはなしに母は知り

失戀に内氣と言ふが記事になり

失戀のそれからお茶屋へも通ひ

席題 相 手 西英子選

今日も来た妻には悪い飲み相手

相手にもされず強請は笑はれる

碁の相手茶菓子も貰つて待つて

母親に相手か言へと詰めやられ

初對面相手の顔にのぼせてる

よくシヤメル相手に一人聽いて

お相手のこつをおぼへて世帯じみ

席題 脱 退 承 春選

脱退の記事へ非常時氣が尖り

輿論皆な脱退と言ふほどを決め

脱退へ日出づる國の意氣昇り

飲む會を脱退したい氣にもなり

席題 櫻 英賀夫選

ルンメンの夢へ櫻は散り續け

思出は深し櫻の咲く祖國

未だ咲かぬ櫻へ出店場所を取り

色街の夜の櫻にソナのあるり

満開の櫻氣になる空横様

厭世の心に霞む櫻なり

櫻 サラ 大和心かも

(人)櫻咲く季節へ取つた七回忌
(地)庭丁の手際をほめる花の客
(天)咲き切つた努力へ櫻散つて

矢舟

一選

西英子

村雨

矢舟

承春

承春

村雨

虹一

靜夫

英賀夫

承春

白羽

矢舟

春選

西英子

矢舟

村雨

白羽

承春

承春

虹一

靜夫

村雨

白羽

西英子

村雨

西英子

川柳

雜誌社

五月三日

夕

尼

緑

之

助

報

席題 新 緑

新緑へのほひが郷愁ともなる夕

新緑へ窓を忘れた我であり

新緑の其の葉に甘き感傷よ

眼をやれば野邊の緑につゞく海

(人)雨やめば新緑いたく眼に逼る

(地)だんまつて新緑の陽に解け合

(天)新緑の葉すれの音に動く空

席題 踊 る 羅 門選

生活に耐へてダンスの小さい肩

(人)春の夜風に委せ踊り疲れた欠伸

(地)人生の舞臺に踊り疲れたたり

(天)本性の絶頂に踊つてゐる顔だ

席題 亂 笑太郎選

亂れたる心枕を持つて来た

亂された心夕の風ぬくし

シャンテリア亂舞の夜が更ける町

(人)亂れ髪梳いて嬉し退院日

(地)こゝろみだるゝ爪なご切

(天)カッパもこぼれた酒に似た胸よ

川柳大地吟社例會

今市町第十四區俱樂部

五月三日

夕

尼

緑

之

助

報

席題 新 緑

新緑へのほひが郷愁ともなる夕

新緑へ窓を忘れた我であり

新緑の其の葉に甘き感傷よ

眼をやれば野邊の緑につゞく海

(人)雨やめば新緑いたく眼に逼る

(地)だんまつて新緑の陽に解け合

(天)新緑の葉すれの音に動く空

席題 踊 る 羅 門選

生活に耐へてダンスの小さい肩

(人)春の夜風に委せ踊り疲れた欠伸

(地)人生の舞臺に踊り疲れたたり

(天)本性の絶頂に踊つてゐる顔だ

席題 亂 笑太郎選

亂れたる心枕を持つて来た

亂された心夕の風ぬくし

シャンテリア亂舞の夜が更ける町

(人)亂れ髪梳いて嬉し退院日

(地)こゝろみだるゝ爪なご切

(天)カッパもこぼれた酒に似た胸よ

川柳雜誌社松江八東兩支部

聯合觀櫻會

四月二十二日

席題 酒 柳人選

女の情痴に飽きた畫の酒

酔ふてみて春の心が知れました

酒呑めば酒に淋しき父となる

酒女、そして二十の春となる

インフレよバラック雨が洩りませ

バラックに五尺の鉢投げつける

バラックに生きる力ののびをする

バラックへ洗濯物のにきやかさ

バラックを樂しき家として歸り

更生へ更生へバラックの熱さ

バラックにアンテナ折

四月二十四日

席題 枕 丸島利生報

枕もとほんぼりあつて春らしく

物思ひ枕に額あてゝ見る

明けきつて枕に残る抜毛あり

枕から離れる朝のおぼるなり

枕金を抱いて枕不安なり

水枕の高低云はず危篤なり

更けゆげご枕一つが待つ身なる

膝枕いゝ子にされてれだられる

淡い夢枕屏風にぶつゝかり

(客)枕元小暗く椿咲くばかり

(同)枕元小暗く椿咲くばかり

(同)枕元小暗く椿咲くばかり

矢舟

六選

赤路

赤路

天痴人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(軸) 袴足へ舞子はたんと風を入れ 夕 鐘

つどひ「第十二回」 吉田水車報

美

美しい人形にされた園い者 夕 鐘
脚線美ちらほら見せた娘が戻り 同 同
顔切りへおのゝ程の美しき 同 同
鷹治郎が出てからチヨボの黒い顔 同 同
病む人の肩うつくしき臍かな 水 車
美しき線となり行く球の音 同 同
美しき手を春の灯へまかしきり 同 同
寝ころべば春の野のみな美しき 同 同

畔柳社會報 (第九回)

五月三日午後四時半ヨリ 大鐵俱樂部一號室

兼題 洋服 山雨樓選

(人) 洋服の柄派手すぎる初對面 九 天
(地) 洋服の客は剥がれる夏座敷 某 人
(天) 初めての背廣へ母は靴を出し 喜 山
(軸) 洋服の幹事へ職人もめが出來 山雨樓
兼題 朝風呂 山雨樓選
鹹切と知らず朝風呂羨ましく 狐 山
朝風呂を追ひ抜いた詰襟 村 夫 子
湯上りの素顔へきつ朝日受け 喜 山
温泉の湯氣を破つて昨夜の妓 同 同
(佳) 朝風呂を出た眼へ跳れる鯉幟 某 人
(人) 朝風呂の桶案外に軽いなり 九 天
(地) 朝風呂で株の騰つたことを聴き 某 人
(天) 將軍の案外細い朝の風呂 同 同
(軸) 朝風呂の二人で水かうめて 山雨樓
兼題 盗人 山雨樓選
盗人の型で盗人路次へ折れ 杏 林

盗人の過去をしみじみ聞いてやり 同 同
つかまつて來た強盗は優男 喜 山
蚊を打つてから盗人は引返し 某 人
(人) 盗人のまだ居る様な裏の屋根 喜 山
(地) 盗人を押へた下女は撮される 某 人
(天) 盗人に籠のバラが咲いてゐる 秀 太
(軸) 萬籟を一番前で泥棒見 山雨樓
互 選

席題 汗 杏 林

鶴嘴に汗光つてる胸の中 杏 林
汗ふいて見返る方に小さい驛 某 人
お便ひの汗はめられたばかりなり 同 同
天主閣霞へ汗の顔をふき 山雨樓
ひつ入つたやうにひるがる馬の汗 同 同
汗が眼に沁む優勝旗寫される 山雨樓
席題 廊下 八 選
アパートの廊下でつゝの戀心 九 天
廊下まで幹事と呼んで金を借り 喜 山
病院の廊下痛々しく歩き 秀 太
罰金へ警察の廊下暗いこと 伊 八
宿の廊下おんなじ柄ですれ違ひ 某 人
(秀) 病院の廊下を遠く子を日舞ひ 同 同
(軸) 當直の廊下へ草履すつて行き 天 八
席題 別 庄 太 選

兼題 別 庄 秀 太

別荘へ爺は餘生の庭掃除 九 天
別荘にフランス語など讀める顔 某 人
別荘の犬うんところ食つた顔 同 同
別荘に居て税金を出し流り 伊 八
(人) 別荘の犬の身分が羨まれ 村 夫 子
(地) 別荘地主の家のみすばらし 杏 林
(天) 別荘を賤病質に姫がなり 某 人
(軸) 別荘の前で門標ふつと見る 秀 太

席題 母 伊 八 選

生れ出る子へ母親のあゝもせう 喜 山
はるゝと母の慈愛の紺緋 同 同
この道を母と歩んだ墓詣り 某 人
(地) 母の忌へ子供みじき著物でゐ 同 同
(天) 母にだけ云はうなごゝ戀思ひ 同 同
(軸) 子が出來て母の寫真を出し見 伊 八
角力吟 題 終點

兼題 終點 某 人

灯の数が增えて終點 近くなり 某 人
終點の酒場へ車掌行くつもり 同 同
ほろ酔へ終點の聲大きすぎ 同 同
終點の驛に真近く波の音 喜 山
嬢曳に終點迄の早いこと 同 同
終點で圓タリの手は五十錢 村 夫 子
終點で追はれるやうにバスに乗り 九 天
四月九日 玉城莞路報
兼題 霸 權 次 耶 選
榮冠へ頼赤らんで女子選手 祥 月
霸權を握つてうれしい朝だつた 磨 路 雄
あゝ遂に霸權我が手に歸しゑたり 磨 路 雄
若節十年遂に霸權も唯涙 三 郎
(秀) 爭霸戦 ロスアンゼルス コーラス 磨 須 雄
(軸) 霸權乗せて太平洋の波靜か 美 城 府
兼題 下 駄 五 選
氣短かな男に下駄が割れました 次 郎
下駄だけがレルのそばに揃へる 梶 人
バスガール今日下駄ですラッパ 梶 人
庭下駄にれはれてゐる雀の子 次 郎
父の下駄はいて幼き足ざりよ 美 城 府

いかに詩社例會 (松江)

兼題協定 梟人・三郎共選

(同)協定に破れし夜を淋しく居 梟人
(人)協定に打算的なる重役も 磨須雄
(地)協定はならず殺氣の堂に満つ 次郎
(天)協定案重役室に菜葉服 莞路

協定も重役の意地に又破裂 三人選
協定に打算的なる重役も 三郎
協定はならず殺氣の堂に満つ 磨須雄
協定へ結束がたき娘子軍 次郎
協定案重役室に菜葉服 莞路
協定のピラが煤けたまゝ貼られ 同

席題巡禮 美城府選
お札所へ来て巡禮は元氣づき 梟人
巡禮の母子へ春陽まるく暮れ 莞路
巡禮の笠だけ見える夢畑 次郎
巡禮へ淋しく春の日は去りぬ 梟人
巡禮へ母の手あつい握り飯 祥月

席題交際 月選
交際も酒保のコップで面白し 美城府
交際之餘儀なく提灯持たされる 次郎
(人)交際に使ふ言葉を授けられ 同
(地)女房の交際長屋の小半日 美城府
(天)交際の笑顔に宿る豪慢さ 次郎

席題溜息 莞路選
溜息が炬燵に背を丸めたる 次郎
溜息にまちつて出る一人言 磨須雄
(人)溜息を笑ふしよう婦のこゝ眼 祥月
(地)失職へ溜息もらずから財布 三郎
(天)階級を呪ふ溜息とは知れる 次郎

對座吟 (神戸)

四月十五日 於明珠居 西村明珠報

胃袋が重し夕刊とりに立つ 明珠
胃袋のたるみを感じ春の晝 同
にぎやかきみんなにわらうごん鉢 春秋
刺箸がうごんの數へぬれてゐる 同
胃袋へサイレンひびきわたるなり 同

社友同人句會

三月二十四日夜 於川柳雜誌社俱樂部
兼題心 麻生路郎選

ほんとうの心になりし朝の粥 鮎美
鐘一つつら心をと戻し 水車
心洗つつて木綿物着る 艸樂
世の人の心に草が青みたり 變人
神がある心に神は近づかず 同
打あける心夜明けまでかゝり 豆秋

ひかり集 その十六

水谷鮎美報

蔓珠沙華 鮎美
魂のほそながき影もつ蔓珠沙華 卜居
一人旅雨のなかなる蔓珠沙華 鮎美
蔓珠沙華あやしき戀の妓の生命 同
いかだ詩社例會 (松江)

五月七日夜 王城莞路報
席題熱血 次郎選
(秀)田園に鎌を打ち込む熱血兒 磨須雄
(同)濁色の凱歌プロシヤの熱血兒 都之介
席題解放 都之介選
休日今日の解放ごこちまでも 磨須雄

解放を待つ時計とらみつこ 利郎
解放へ散歩歸りの靴の音 祥月
公休の空あく迄も澄んで居る 卷二
解放の朝を氣ますく時雨する 次郎
(秀)三三年の父解政主義ならん 莞路

席題辛辣 卷二選
辛辣な言葉に友は去つて行き 磨須雄
辛辣な手胸が榮轉となりし今日 莞路
辛辣な筆先となる置手紙 都之介
辛辣な君の眼鏡が光るなり 次郎

席題目薬 五郎選
目薬をつけた涙と知らぬなり 卷二
目薬に寂しい夏と意識する 次郎
目薬はしみるまぶたに湧く涙 祥月
寒村のこゝにもスマイル賣る居り 莞路
笑つてはならぬスポイト叱られる 都之介
目薬は子に入れさせて横になり 祥月
目薬がこみすす心もいたみす 卷二

席題若讀込み 莞路選
裸錢着いたもとで鳴つてゐる 卷二
若輩にしては鋭き神經よ 次郎
コマルトの空へ若さを投げけむ 次郎
カフエーの椅子へ重役若くなり 同
若き日の君が理想を遠く生き 次郎
善真な若さを誘ふ酒場の灯 同
若者の戀は歩けばいゝのなり 卷二
ハイヒール若一心が躍るなり 同

席題住作 祥月選
未亡人若く見せたる社交界 磨須雄
若者の眼にスカートが短かすぎ 卷二

若干は吞ましてもよい親心
若き日を語るに傷が多すぎる
どう塗れば若く見えるか未亡人
（人）お、虹に似て若き日の空想よ
（同）若輩の熱が高ぶる 不當金
（地）裸火へ警若のケロなプロフェル
（天）若人に海の飛沫よ 痛快な
次郎 都之介 都之介 都之介

四月二十三日 北川あや美報

酔ひ、眞實
ほんとうに、さうなくとも酔居る
酔ひしれた振で別れの手を握り
眞實を笑ひの中へ匂はせる
いくらかの眞實もありウエトレス
眞實をそらせて、話弾んでゐる
眞實も云へず酒の香、咽せて来る
あや美 紫石 同 紫石 同

かほる居偶會

五月四日 高橋かほる報
お蒲團が裏を見せてる 五月晴
川風に煙草を捨てた 五月の灯
疊屋の糸がなつて 五月暗
棧敷裏話が切れず 五月なり
ぶら／＼と歩いて来た 五月なり
スマートになつた 五月の御用聞き
洋食の方へ知り合ひ行つ了
知り合ひと歩調の合つた夜の風
縁日を知り合ひ斜に抜けて行き
食堂で知り合ひ買ふた物を見せ
かほる 同 華水 同 華水 同 華水

佳日の集り

四月廿九日 於羅門居

題 晴、若葉、フェルト、愛
新緑の並木二人の肩が合ひ
裏切られた戀フェルトが重い
蛙が鳴く頃若葉がぐんぐん伸びて
フェルトの軽くこつて初夏と知り
惱ましさそつとフェルトはいて
日と風を残るノエルト春の街
愛人の眸明る 若葉々々
愛しき生毛に従ふ 牡丹刷毛
同 同 羅門

光笑會會報

五月十一日 於里十九居

凝り性 永田里十九報
凝り性の兄は机にもたれてゐる
凝り性の袖口なんぞ綻びて
凝り性の染め直しても氣に入らず
凝り性の松は枝を曲げ
凝り性が新聞記事ではめられる
凝り性を父は黙つて見てゐます
禿 互 選
禿げ工合しごとく圓満らしく見え
禿げてゐる司會者膝へ手を揃え
何分に此の禿げではと逃げて居る
そるばんへ涼しい禿となつてゐる
丸窓へはつきり出した禿頭
里十九
陸會句報 (神戸)
五月十日 西村明珠報
三原山神は奈落の底ですか
神様を本氣でおがむ母があり
情々 彌之助

自己主義へ神は淋しくまつられる
慾望が苦惱が神へ縋まづき
喫茶店
冷えたお茶待つ瞳にしぶく窓の雨
青春のさばつてゐる 喫茶店
喫茶店其の日の炭をつぎ
退屈が何時か常連にしてしまひ
喫茶店が女と話すコツを知り
同 同 高雄

美しい娘憶面なく歩るき
雛祭りもう喜ばぬ娘なり
何故となく心にはずした娘の微笑
羞恥心もあつて娘は喜ばれ
高雄

靈場めぐり (その八)

五月二日 水谷鮎美報

藤井寺
街の子と遊ぶ若僧へ砂埃り
松風がさばく藤井寺の晝
同 同 鮎美
岡寺
岡寺の雨にお釋迦を拜むなり
鐘ひやくつゝちの花は眞盛り
岡寺の大坂の寄附はいととり
農夫らの鍬洗ふ水光りある
同 同 鮎美
壺坂寺
壺坂を真女お里の氣で登り
佛像のあま茶をかけてよばれたり
鳥の聲 壺坂寺の春暮る
寺の灯が見へる樹間を下りてゆく
同 同 鮎美

いかだ詩社例會 (松江)

四月廿三日夜 岡崎祥月報

兼題 春の踊り

奈良井次郎選

雪洞へ入り足白し踊りつ子 祥月

ステップも見事に踏めて春の宵 荜路

花模様同志タマシヨの一踊り 都之介

君を見る春の踊りに血が躍る 荜二

兼題 すみれ

岡崎祥月選

あの丘ですみれをつんだ思ひ出よ 荜路

黄昏れる氣配にすみれおのけり 都之介

(秀) 嬌笑の中にすみれのあせし色 次郎

兼題 花吹雪

梶谷巷二選

花吹雪浴びる心地よ公休日 次郎

花吹雪ぼうやのせななををながき 祥月

花吹雪靴の調が踊ります 都之介

席題 清き一票

田中都之介選

頼りない清き一票飯を食ふ 次郎

汗ばんだ手で一票を握りしめ 研一路

狡猾へ清き一票笑つて 荜路

裏町のこゝにも清き一票よ 磨須雄

清き一票羽織はかまで出かけて来 研一路

清き一票理想選挙の旗印 荜二

一票へ清き心のこもる筆 祥月

果敢なくも清き一票字にある 次郎

席題 パラソル

神田研一路選

パラソルの先で字を書く待ちぼう 都之介

鳥の目に又パラソルが二つ三つ 荜二

パラソルへ無事な二人の顔がある 次郎

春の陽をパラソルの人よけて来る 磨須雄

席題 パラソル

國城荜路選

パラソルの柄をいぢく戀を知り 荜二

パラソルはクル〜五月の空は晴 次郎

愛人を買へばパラソルよく似合ひ 祥月

次郎

都之介

荜二

荜路

都之介

緑雨居偶會

橋本緑雨報

五月十五日

まだ靴を脱がない父へ抱かれつゝ 互選

父の目にまだ末の娘が嫁がすゐる 同

子の寝顔見ながら父は服を脱ぎ 同

夕飯に座つて父の顔になり 同

父の痛癢がありがたかつた背と 同

干せ死もさせま 父の神経質 變人

叱る父なだめる母もありながら 久流美

だかされて父は黙つて外へ出る 葉光

恩給の父は日向が有難し 緑雨

結美

明珠居小集 (神戸)

西村明珠報

五月三日

支關の音で御機嫌振りを知る 互選

支關の犬ひきたれたこともなく貧し 貞三

支關の狹きこゝる顔して 彌之助

金借りに大支關へさしかゝり みさを

支關子知らぬ事として口が過ぎ 春秋

考へる 五選

考へる事なき人のほがらかさ 真三

考へてゐると霜焼かゆくなり 明珠

貧乏の壁へ考へつき當り 春秋

琵琶湖島めぐり

福田鶴峰報

五月十三日

唐崎の濱を淋しく見て通り 芦穂

芦は伸び切つてない浮御堂 同

若竹に陽の光あり浮御堂 同

さくなみに月はくだけて浮御堂 山月

スクリウに白波をける沖の島 同

湖に残す煙に酔ひ疲れ 緑雨

多景島もすつかり春になりきつて 同

竹生島もう船は出る名残りかな 鶴峰

二南居四人會

楊井二南報

五月七日

腰元、日曜 勝たしたい方へ腰元伸び上り 二南

腰元は十九離れでお手が鳴り かほる

何を著て行くと第三日曜日 同

日曜の壘へお茶が沁んで行き 同

日曜の兄に電車が遅れて 華水

先日の禮に日曜あらたまり 同

蔭日を聞く元の肩いかり 同

腰元の中の一人が見出され 里十九

日曜日今日大股で歩くなり 同

日曜日よんごころなく動物園 同

會ふ所を變へた今日の日曜日 同

感 ひとひ (第十一回)

姫田夕鐘報

喫茶店感じへ尻の長いこと 水車

責任感春の埃をあびて行き 同

感想を問へば彼女を笑ふのみ 同

病んでから友の情を感じゐる 夕鐘
肩あげの娘が感じのよき言ひに来る 同
初対面の悪い感じをとり戻し 同

川柳風 呂(その四) 水谷鮎美報

雁 静かな月である雁がおりて水のちぎれ雲より雁の一系列雁鳴く月へ船唄の冴ゆるなり 同
石竹 美

青空へカソリン臭い街の春 坊茄子
青空へ父はせつせと鉄をとり 同
幻ろしがふきとんでゐる碧い空 同
青空へ悲しき戀うつけもの 同
同 美

白壁に戀が叶ふた羞かしさ 晩春
荒壁のまへへ總領の嫁がくる 同
壁にはかなき戀をふがいて 同
同 美

太陽が煙る都會の憂鬱や 遊歩
太陽へバットを吸ふてゐたりけり 同
同 美

施療患者に蟻殺される 静太
陽のなかに蟻死んでゐる 同
同 美

看護婦らの合唱に春がある 静太
外出して 同
同 美
バットを吸へば青春がある 同
春の丘から草の匂ひがながれ 同
傘させばうれしき春の泥のなか 同

川柳 松山句會(松山) 河合紫石報

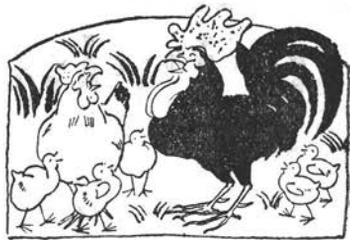
五月十三日午後六時より 伊豫新報社後援の下に伊豫新報社にて開催されました。今治市より態々曉童、紫陽兩君が見へ初夏の宵を作句にすこしました。散會午後十時半 紫石報出席者 紫泉、作林、千春、靈子、松葉、紫陽、曉童、麥舟、青帆、松石、大觀、時雨樓かき松、紫石、五健、春峯

兼題「紫一」 紫石選
紫の襟で二人の母となり 春峯
紫のフクサ舞妓のいゝ姿 麥舟
紫の たすき忌日の姉妹 青帆
紫に染めた半襟よく似合ひ 千春
紫にトカケの背の光る春の陽 曉童
紫の襟に師匠のまだ若し 芳岸
紫の 袴になつて女事務 大觀
紫が一際目立つ鉢の菊 松葉
紫の着物が流行るウエトレス 大觀
廣重は紫雲を描く刷毛を持ち 大觀
紫の花咲く五月風薫る 大觀
人紫の房たつぶりと柳の藤 大觀
(地)年若し見られ紫色を買ひ 大觀
(天)線は紫もあり虹の橋 大觀
(軸)紫の袈裟で浮世と別に生き 大觀

兼題 ゴム判 童選
ゴム判の手際を客は覗き込み 千春
ゴム判を出せば書留只笑ひ 松葉
不渡の小切手ゴム判字のかすれ 松葉
開店の披露ゴム判派手に押し 松葉

兼題 心臓は躍る 五健選
初恋が、こんなに躍る心臓 五健
消して消してはソリソリと書く手紙 大觀
躍つてるまゝを戀文書きつらね 大觀
心臓の波へ見合のお茶がゆれ 大觀
第二巻心臓躍るところで切れ 大觀
試験場へ運ぶ躍る心臓 大觀
心臓の通りへんの字がふる心 大觀
心臓を押へ發車の間に合はず 大觀
逢えば又言ひ出し得ずに躍る胸 大觀
打明けるまで心臓が躍るなり 大觀
(秀)心臓を躍らすエロへ見榮有、 大觀
(同)寫眞班躍る胸なすエロへ只、 大觀
(同)きり出しも出来ず心臓へひとり、 大觀
(同)近づくスリッパ心臓おどる 大觀
(同)心臓は躍る桃色の便り 大觀
(人)心臓の高鳴り隠す窓へ立ち 大觀
(地)干物と知らず心臓躍ること 大觀
(軸)心臓の鼓動へ冷茶グット飲み 大觀
(軸)三原山高なる胸でとり圍み 大觀

ゴム判で兎も角買った猫入らず 春峯
(住)ゴム判へインクが切れた書立て 春峯
(同)旅の子の便りゴム判押しして 春峯
(同)ゴム判の名所端書へ巾を取り 紫陽
(同)ゴム判のダブル書類へ退社のベル 麥舟
(人)ゴム判をせがむ電話の假事務所 青帆
(地)割引のゴム判軽く押し續け 素泉
(天)スタンプの意匠觀光者に嬉し 素泉
(軸)ゴム判をハツキリ押さかしの 五健
兼題 心臓は躍る 五健選
初恋が、こんなに躍る心臓 五健
消して消してはソリソリと書く手紙 大觀
躍つてるまゝを戀文書きつらね 大觀
心臓の波へ見合のお茶がゆれ 大觀
第二巻心臓躍るところで切れ 大觀
試験場へ運ぶ躍る心臓 大觀
心臓の通りへんの字がふる心 大觀
心臓を押へ發車の間に合はず 大觀
逢えば又言ひ出し得ずに躍る胸 大觀
打明けるまで心臓が躍るなり 大觀
(秀)心臓を躍らすエロへ見榮有、 大觀
(同)寫眞班躍る胸なすエロへ只、 大觀
(同)きり出しも出来ず心臓へひとり、 大觀
(同)近づくスリッパ心臓おどる 大觀
(同)心臓は躍る桃色の便り 大觀
(人)心臓の高鳴り隠す窓へ立ち 大觀
(地)干物と知らず心臓躍ること 大觀
(軸)心臓の鼓動へ冷茶グット飲み 大觀
(軸)三原山高なる胸でとり圍み 大觀



編輯の窓 町二記

▼前號の堂々たる登場のあとをういて、六月の本號が初夏の好ましさを以てデビュウする。御愛讀と御好評を賜りたる。

▼新進氣鋭の新人の出現と擡頭とを翹望し創作吟の質的向上を期待して、今月から近作柳樽欄の掲載方法を改めた。奮つて佳吟を寄せられんことを。光耀抄の女流作家の句も今月は近作欄に合併して入れである。

▼山雨樓、琴人そして僕が、それら文章を書いたが、主幹の意をうけて掲載を保留し

その代り新銳丹路君を加へて四人で句評を試みたなるべく言葉を少くして、澤山の句に言及するやう心掛けてみた。▼既報の通り六厘坊忌を五日夜道頓堀俱樂部で開催した。松窓、當百、半文錢、かこく、ふくべ氏等参加せられ、故人を偲ぶ記念すべき集りであった。當夜の講演は特に筆記して本號に掲載した。「六厘坊の思ひ出」の記事がそれである。挿入の寫真二葉は六厘坊の筆蹟と十六才の時の面影である。當夜はこの二葉を特に繪葉書に製作して出席の人々へ贈呈した。

▼六厘坊忌閉會後、主幹は松窓、半文錢兩氏と共に、當時主幹の宿泊してゐられた上六ホテル百七號室で、六厘坊句集の下相読をされた。多分この秋頃、京都の川柳叢書刊行會のシリーズの一つとして世に出る筈である。天才と自ら稱した六厘坊の眞價が初めて後進の我々に開明されるであらう期待して待つ所以である▼第一次普選に無産階級を代

表して立候補し、見事當選、爾來市政に參與して、絶えず「ラレタリア」の味方として活動されてきた同人庄万よし氏と本誌創刊以來御厄介になつてゐる藤本兄弟社々主で賛助員の藤本卯之助氏が、今度の市議戦に中原の塵を追はれてゐる。切に幸運の射手たられんことを祈る。

▼東西川柳家の交歡會を、都合によつて名古屋で行はず、静岡でこの八月に行ふから、柳人誘ひ合せて來駕せられたいと書翰が、同地の榎田珍竹林氏から主幹宛に來てゐる奮つて参加されんことを希望さい。詳細は主幹宛御照會下さい。

▼「象牙の塔」のあるじとして本誌とも馴染深かつた松尾唯緒氏は、去る七日北畠の高校附近を、自轉車で通行中、トラツクに跳ねられ、痛ましい最後を遂げられた。行年三十歳。哀悼に絶えない。故人と生前親しかつた人々が集つて去る十五日夜追悼會を催され

た。當夜は主幹夫妻をはじめ寺川信、眞島豪、太田隆彦、大西長三郎、中本彌三郎其他の諸氏二十三名。先づ路郎氏の挨拶あり、時乃夫人は大西氏と共に阿彌陀經をあげられた。焼香終つて各々故人の追憶談を語り、故人愛唱のレコードをかけて涙新たるを覺えたが眞島氏の閉會の辭で、このしめやかな一夜を閉ぢられた。

▼去る十四日夜、實業會館で川柳東區人會を開催、本社賛助員藤本卯之助氏をはじめ多數出席されたが、杵家七美佐の長唄賤の苦環の演奏あり、盛會であつた。尙主幹及葉平氏は講演された。

▼主幹と相識の間柄で月斗派の俳人として著名で、川柳家としても知られた花木三平（俳號伏鬼）氏の夫人花明女史が亡くなられた。謹んで悼む社では色々新しい試みが計畫されてゐる。逐次具體化した誌上に現れると思ふ。諸氏の御期待と御後援を祈ります

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樞」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清配の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」さ封筒に未記する事。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第八號課題

六月五日締切
(各題十句以内)

- ▼髭 蛭子省 二選
- ▼海岸 橋本綠 雨選
- ▼瞳 水谷 鮎美選

第十卷第九號課題

七月五日締切
(各題十句以内)

- ▼牛 中澤 濁水選
- ▼燈明 伊藤綠之助選
- ▼柿 西田 艸樂 共選
- ▼日野 華水

每號募集

- ▼近作柳樞(十句) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈禮廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

- 一 部 金參拾錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣告

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は舊曆日座大阪七五〇番へお拂込みになるのが一番確實でありませす▼請代受領は送本によつて御承知願ひませす▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひませす▼御希望により集金郵便を差立てませす▼御不在中でも頂ける様に願ひませす、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けませす▼御注文には何月號よりと御指承願ひませす▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひませす▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年五月廿五日印刷
昭和八年六月一日發行

第十卷第六號
(毎月一回一日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二 郎

發行所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

電話天下茶屋二五七九番

大阪府住吉區平野西之町八三番地

事務所 川柳雜誌社

振替大阪七五〇番
電話天王寺一六七番

賣捌書店
(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
(東京 仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、寶文館(函館) 石塚
(京都) 三宅 (松山) 弘文舎 (石川縣) 小松ばかりや

（順はろい） 川柳雜誌關係人の々

賛助員

池澤樂居 長谷川徹雄 大谷弘平 岡本一雄 片岡直方 笠原純生 嘉納辰二 田中秀二 長崎柳太 長岡晴太郎 國枝史郎 藤野清之助 藤村史郎 赤井清一 末弘嚴太郎 伊藤彦造

鳥山一歩 大島濤明 大谷五子 岡田三郎 龜井童子 川上三太郎 米村あづま 吉田清馬 田村孝介 谷脇素文 窪田銀波 長野吉高 安川流美 前田雀健 前田五健 柴谷柴舟 篠原春雨 蛭子省二

藤里好古 森東魚 岩垣日本 尼田夢村 生田翠助 石曾根太郎 石森食太郎 市塙靜食 春元紀太 西村山月 西淵明山 大淵貴山 谷村八穂 立井登美 中島鐵洲 中野おさむ 中野柳陽

中野柳陽 三宮岸喜北河櫻阿江越熊奧增松山桑上村奈中 輪岡上多山合井形戶み久 夏白錦春悟紫圓一 曉峰石秋耶石角杉水紅山柳子迷郎水裡人水路 同 首須妹平平日姬野平白水三 藤崎尾塚司華夕若梅計 竹豆變亂人笑 楓秋人笑 松山吉橋 山本水綠 松盛丹水 福田琴丹路 安西山雨 西杏山樓 麻生乃三 高橋かほる 住田亂耽 永田里十九主 福田鶴峰 小松支部(石川縣)幹事上野錦水 御池橋支部(大阪市)幹事村松夢裡 松江支部(松江市)幹事奈具井柳人 塗青支部(大阪)幹事熊谷紅 西條支部(愛媛縣)幹事荒井英賀夫 光耀會(大阪)幹事竹内機見女 萩ノ茶屋支部(大阪)幹事奥野禿山 北濱支部(大阪)幹事谷村稔 今里支部(大阪)幹事吉田水車 奉天支部(奉天)幹事江戶みづる 八東支部(島根)幹事平塚亂笑

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 萬よし 天滿支部(大阪市)幹事北山 悟郎 神戶支部(神戸市)幹事日野 華水 函館支部(函館市)幹事龜井 花童子 高知支部(高知市)幹事 中澤 濁水 梅田支部(大阪市)幹事 永田 里十九 螢ヶ池支部(大阪府)幹事 石森 靜太 田邊支部(和歌山)幹事 辻 左馬 飯川支部(島根縣)幹事 尼 綠之助 豊橋支部(愛知縣)幹事 白井 梅里 加古川支部(兵庫縣)幹事 宮田 泰山 京都支部(京都市)幹事 平岩 司郎 鳥取支部(鳥取市)幹事 中島 鐵洲 堺支部(堺市)幹事 八木 夜美路 松山支部(松山市)幹事 河合 紫石 守口支部(大阪府)幹事 朝田 新水 御旅支部(大阪市)幹事 生田 翠夢 高岡支部(富山縣)幹事 越田 久水 天王寺支部(大阪市)幹事 福田 鶴峰 鶴町支部(大阪市)幹事 妹尾 變人

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

大正十三年三月三日第三種郵便認可(毎月一圓一百發行)
昭和八年五月廿五日印刷(本誌昭和八年六月一日發行)

川柳雜誌 (第一一三號)

定價金三拾錢